

影ヶ浦古墳群 1

—影ヶ浦古墳群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第241集

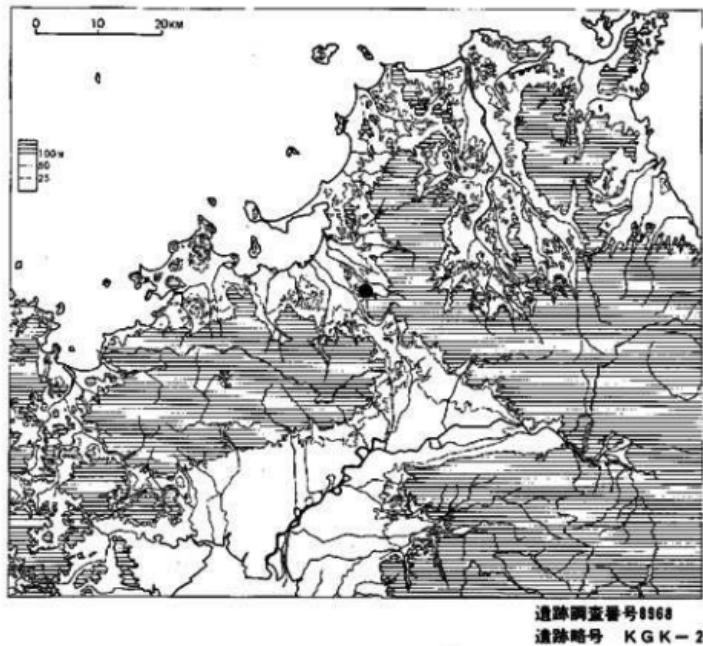
1991

福岡市教育委員会

影ヶ浦古墳群 1

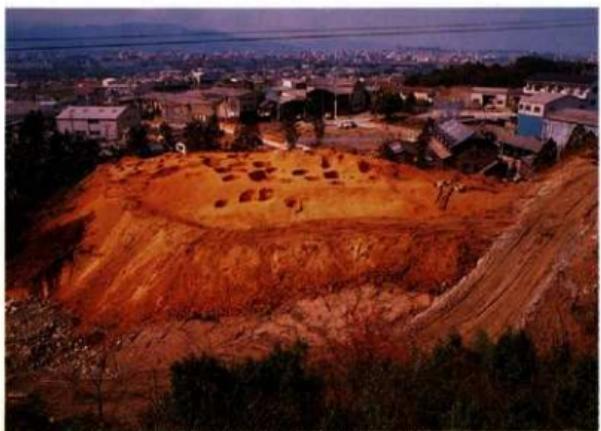
—影ヶ浦古墳群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第241集



1991

福岡市教育委員会



影ヶ浦古墳群第2次調査地点全景（南東から）



調査風景

序 文

福岡市の開発・発展は最近、日紛しいものがあります。それは都心部のみならず、周辺の山林部にも及んできています。

影ヶ浦古墳群は福岡平野の東を限る月隈丘陵に立地しています。丘陵部は、今、開発が進行し、その地形を大幅に変えています。

ここでは古墳群のみならず、弥生人が食料を貯えた貯蔵穴群、家の跡、墓地等が発見され、具体的な生活の様子を知る事ができます。

今回の調査でも、古墳2基、貯蔵穴57基を発見し、更に研究を進める事ができました。

本書はこの成果を収めたものであり、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに研究上役立てれば幸いです。

調査から整理に至りましては多くの方々の御理解と御協力を賜わりましたことに対し、心から感謝の意を表します。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が国庫補助事業として1990年1月20日から同年3月10日月10日にかけて実施した影ヶ浦古墳群第2次調査の報告書である。
2. 本書の古墳群を荒牧、貯蔵穴の項を田崎博之が担当し、執筆した。
3. 現場での図面作成は荒牧、山崎、牛山裕二を中心になって行なった。
4. 遺物実測は各担当で行い、浮遊は横山氏の協力を得た。現場での写真撮影は荒牧、遺物は田崎が行なった。
5. 資料整理から報告書作製に至るまで、木村綱子、野村弥生、安部国恵、池見泰子、山口英子、片野ゆき子、小西千晶さんに補助していただいた。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 当調査の出土遺物、実測図及び写真等の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに保管収蔵される予定である。

遺跡調査番号	8968	遺跡略号	K G K - 2	分布地図番号	011-B-10
調査地地籍	福岡市博多区大字金隈影ヶ浦326				
開発面積		調査対象面積	1113m ²	調査実施面積	1113m ²
調査期間	平成2年1月20日～平成2年3月10日				

本文目次

I 影ヶ浦古墳群とその位置.....	1
1. 地形.....	
2. 周辺道路.....	
II 調査の経過と方法.....	3
1. 調査に至る経過.....	3
2. 調査体制.....	3
3. 調査の経過と方法.....	3
1) 現況地形測量.....	3
2) 調査区設定.....	3
3) 表土剥ぎ.....	3
4) 古墳調査.....	4
5) 勝藏穴調査.....	4
6) 土層.....	4
III 調査の記録.....	5
1. 古墳調査.....	5
立地.....	5
(1). 第1号墳.....	5
出土遺物.....	6
(2). 第2号墳.....	8
立地と現状.....	8
地山整形.....	8
墳丘.....	8
墳丘内集石.....	10
石室.....	11
出土遺物.....	14
2 弘生時代の遺構と遺物.....	19
(1) 勝藏穴.....	
S U - 01.....	19
S U - 02.....	22
S U - 03.....	27
S U - 04.....	28
S U - 05.....	29
S U - 06.....	30
S U - 07.....	31
S U - 08.....	33
S U - 09.....	34
S U - 10.....	34
S U - 11.....	35
S U - 12.....	38
S U - 13.....	38
S U - 14.....	40
S U - 15.....	40
S U - 16.....	40
S U - 17.....	46
S U - 18.....	48
S U - 19.....	48
S U - 20.....	49
S U - 22.....	50
S U - 23.....	51
S U - 24・25・26.....	51
S U - 27.....	51
S U - 28.....	53
S U - 29.....	53
S U - 31.....	54
S U - 32.....	54

S U - 33.....	55	S U - 52.....	70
S U - 35.....	56	S U - 53.....	70
S U - 36.....	57	S U - 54.....	70
S U - 38.....	57	S U - 55.....	70
S U - 39.....	57	S U - 56.....	71
S U - 40.....	58	S U - 57.....	71
S U - 41.....	59	S U - 59.....	71
S U - 42.....	63	S U - 67.....	71
S U - 43.....	63	S U - 68.....	72
S U - 44.....	65	(2)土壤	
S U - 45.....	66	S K - 21.....	73
S U - 46.....	67	S K - 30.....	73
S U - 47.....	67	S K - 34.....	73
S U - 48.....	67	S K - 37.....	73
S U - 49.....	67	S K - 60.....	73
S U - 50.....	68	S K - 61.....	73
S U - 51.....	69	S K - 62.....	75
(3)小穴.....			75
IV まとめ.....			76

挿図目次

図1	遺跡分布図 (1/25,000)	
図2	周辺地形図(1/5,000).....	1
図3	調査前状況 (北東から)	2
図4	貯蔵穴断面.....	4
図5	第1号墳、墳丘遺存状況 (北から)	5
図6	第1号墳、墳丘遺存状況 (東から)	5
図7	第1号墳、墳丘断面 (南東から)	6
図8	現況地形測量図(1/200).....	折り込み
図9	第1号墳出土遺物実測図 (1/3)	7
図10	第2号墳地山整形 (北東から)	8
図11	第1号墳・第2号墳地山整形測量図(1/200).....	9
図12	第2号墳丘内集石実測図 (1/30)	10
図13	第2号墳丘内集石 (北から)	10
図14	第2号墳横軸土層断面 (西から)	10
図15	第1号・2号墳丘土層断面 (1/40)	折り込み
図16	第2号墳石室全景 (西から)	11
図17	第2号墳石室右側壁 (北東から)	11
図18	第2号墳石室左側壁 (南から)	11
図19	第2号墳前庭部 (南東から)	12
図20	第2号墳前庭部上層断面 (南西から)	12
図21	第2号墳石室実測図 (1/40)	13
図22	第2号墳出土鉄器・石器実測図 (1/2)	14
図23	第2号墳出土遺物実測図 (1/3)	15
図24	第1号・2号墳周辺表採遺物 (1/2・1/3)	16
図25	第1号・2号墳出土遺物	17
図26	第1号・2号墳出土遺物	18
図27	弥生時代の遺構全景 (南から)	20
図28	弥生時代の遺構全景 (東から)	20
図29	影ヶ浦遺跡 弥生時代遺構配置図 (縮尺1/150).....	折り込み
図30	SU-0142 実測図 (縮尺1/60)	21
図31	SU-01上部堆積の黒色土	21
図32	SU-0142 (東から)	21
図33	SU-01出土土器実測図 (縮尺1/4)	22
図34	SU-02実測図 (縮尺1/60)	23
図35	SU-02土層断面	23
図36	SU-02石剣出土状況	23
図37	SU-02出土上器実測図 1 (縮尺1/4)	24
図38	SU-02出土上器実測図 2 (縮尺1/4)	25
図39	SU-02出土土器実測図 3 (縮尺1/4)	26
図40	SU-02出土土器実測図 4 (縮尺1/4)	27
図41	SU-02出土投弾実測図 (縮尺1/3)	27

図42	S U - 02出土投弾	27
図43	S U - 02出土石剣	27
図44	S U - 02出土石剣実測図 (縮尺 1 / 2)	27
図45	S U - 03実測図 (縮尺 1 / 60)	28
図46	S U - 03 (北から)	28
図47	S U - 03遺物出土状況	28
図48	S U - 03出土土器実測図 (縮尺 1 / 4)	28
図49	S U - 04・06・55 実測図 (縮尺 1 / 60)	29
図50	S U - 05実測図 (縮尺 1 / 60)	30
図51	S U - 05床面直上の礫群	30
図52	S U - 07実測図 (縮尺 1 / 60・1 / 30)	31
図53	S U - 07遺物出土状況 1	31
図54	S U - 07遺物出土状況 2	31
図55	S U - 07出土土器実測図 (縮尺 1 / 6・1 / 4)	32
図56	S U - 08実測図 (縮尺 1 / 60)	33
図57	S U - 08下半部の遺存状況	33
図58	S U - 08出土土器実測図 (縮尺 1 / 4)	34
図59	S U - 08出土投弾実測図 (縮尺 1 / 3)	34
図60	S U - 08出土投弾	34
図61	S U - 09・10 実測図 (縮尺 1 / 60)	35
図62	S U - 09 (西から)	35
図63	S U - 11実測図 (縮尺 1 / 60)	36
図64	S U - 11	36
図65	S U - 11 2段堀り部分	36
図66	S U - 11出土土器実測図 (縮尺 1 / 4 拓影 1 / 3)	37
図67	S U - 12・13 実測図 (縮尺 1 / 60)	38
図68	S U - 12 (東から)	39
図69	S U - 13半蔵状況	39
図70	S U - 13出土土器実測図 (縮尺 1 / 4)	39
図71	S U - 14・15実測図 (縮尺 1 / 60)	41
図72	S U - 16遺物出土状況 1	41
図73	S U - 16遺物出土状況 2	41
図74	S U - 16遺物出土状況 3	42
図75	S U - 16実測図 (縮尺 1 / 60)	42
図76	S U - 16出土土器実測図 1 (縮尺 1 / 4)	43
図77	S U - 16出土土器実測図 2 (縮尺 1 / 4)	44
図78	S U - 16出土土器	44
図79	S U - 16出土土器実測図 3 (縮尺 1 / 4)	45
図80	S U - 16出土土器実測図 4 (縮尺 1 / 4)	46
図81	S U - 17・59実測図 (縮尺 1 / 60)	47
図82	S U - 17横口部 (本体側から)	48
図83	S U - 59 2段目床面	48
図84	S U - 17出土土器実測図 (縮尺 1 / 4)	48
図85	S U - 18・19実測図 (縮尺 1 / 60)	49

図86 S U-18・19 (南から)	49
図87 S U-20実測図 (縮尺1/60)	50
図88 S U-20上部遺物出土状況	50
図89 S U-20出土上器実測図 (縮尺1/4)	51
図90 S U-22・23実測図 (縮尺1/60)	52
図91 S U-22 (南から)	52
図92 S U-23 (西から)	52
図93 S U-24~26	52
図94 S U-27実測図 (縮尺1/60)	53
図95 S U-28実測図 (縮尺1/60)	53
図96 S U-28 (西から)	53
図97 S U-29実測図 (縮尺1/60)	54
図98 S U-29 (西から)	54
図99 S U-31実測図 (縮尺1/60)	55
図100 S U-31土層断面	55
図101 S U-31土層断面図 (縮尺1/60)	55
図102 S U-32・33実測図 (縮尺1/60)	56
図103 S U-33 (北から)	56
図104 S U-32 (北から)	56
図105 S U-35・36実測図 (縮尺1/60)	57
図106 S U-38上層断面	58
図107 S U-38実測図 (縮尺1/60)	58
図108 S U-39実測図 (縮尺1/60)	59
図109 S U-39 (南から)	59
図110 S U-40実測図 (縮尺1/30・1/60)	60
図111 S U-40 (東から)	61
図112 S U-40遺物出土状況	61
図113 S U-40出土上器	61
図114 S U-40出土上器実測図 1 (縮尺1/4 拡影1/3)	62
図115 S U-40出土土器実測図 2 (縮尺1/4)	63
図116 S U-40出土土器実測図 3 (縮尺1/6)	64
図117 S U-40出土石包丁実測図 (縮尺1/2)	64
図118 S U-40出土石包丁	64
図119 S U-41実測図 (縮尺1/60)	65
図120 S U-41出土土器実測図 1 (縮尺1/4)	65
図121 S U-41出土上器実測図 2 (縮尺1/6)	65
図122 S U-43・44実測図 (縮尺1/60)	66
図123 S U-45~48実測図 (縮尺1/60)	68
図124 S U-49~54実測図 (縮尺1/60)	69
図125 S U-49出土土器実測図 (縮尺1/4)	70
図126 S U-10・27・57・58 (南から)	72
図127 S U-56・57実測図 (縮尺1/60)	72
図128 S K-21・30・37・60~62実測図 (縮尺1/60)	74



- | | | |
|------------|-------------|--------------|
| 1. 宝満尾東古墳群 | 10. 般音ヶ浦古墳群 | 19. 御陵古墳群 |
| 2. 宝満尾西古墳群 | 11. 特用ヶ浦古墳群 | 20. 中古墳群 |
| 3. 犬場古墳群 | 12. 特田ヶ浦古墳群 | 21. 鶴青浦古墳群 |
| 4. 立花字古墳群 | 13. 特出ヶ浦古墳群 | 22. 横ヶ丘古墳群 |
| 5. 佐野古墳群 | 14. 岩ヶ浦古墳群 | 23. 石長浦古墳群 |
| 6. 文珠谷古墳群 | 15. 影ヶ浦古墳群 | 24. 九尾1号墳 |
| 7. 七曲古墳群 | 16. 特田ヶ浦古墳群 | 25. 宝満尾古墳 |
| 8. 金剛山古墳群 | 17. 特田ヶ浦古墳群 | C 影ヶ浦1号墳・2号墳 |
| 9. 金鏡遺跡 | 18. 特田ヶ浦古墳群 | |

図. 1 遺跡分布図 (1/25,000)

I 影ヶ浦古墳群とその位置

1. 地形

福岡平野は、北側を玄界灘に面し、後背に背振山塊、三郡山塊をひかえた海岸平野である。当調査の影ヶ浦古墳群は族義に見た福岡平野の東を限る月隈丘陵に位置する。

月隈丘陵は南は太宰府市の大城山（標高410m）から北西の博多湾に向かって延びていく。月隈丘陵西側には、御笠川が平行して北流し、更に西側を北流する那珂川とともにその營力によって福岡平野の沖積地を形成する。

福岡平野の周縁に位置する丘陵部と対峙して、中央の平野部には、南は春日市須玖付近から北へ断続的に中位段丘面（標高7~30m）が延びている。

2. 周辺遺跡

ここでは調査の中心を為す弥生時代と古墳時代について略述する。

弥生時代 月隈丘陵尾根から西側へ平野部を望むように派生した丘陵上には、近年、多くの遺跡が確認された。その多くは、甕棺や土塚墓群で前期末より見られる。当調査区の北方に宝満尾遺跡が位置する。11基の袋状堅穴（前期後半？）6基の甕棺墓群（中期後半）、石蓋土壙墓、石棺を含む16基の土塚墓群（後期前半）が検出された。この貯蔵穴群は平野部へ張り出した丘陵頂部に位置する古墳の墳丘下から検出され、当調査区の貯蔵穴群の立地と類似する。宝満尾



A-4 影ヶ浦遺跡群、B-11丸山古墳、B-10影ヶ浦古墳群
B-9 梶ヶ浦古墳群、
アミは当調査区を示す。

図.2 周辺地形図 (1/5,000)

道路の北側のやや奥まった丘陵に、中期からの住居跡が検出された久保園遺跡、大谷遺跡が位置する。集落の全容は未だ解明できていないが、今後の調査により、月限丘陵に展開する弥生人の土地利用、生活パターンを明らかにしていく事が望まれている。

なお宝満尾遺跡の土墳墓から出土した内行花文明光鏡、赤穂ノ浦遺跡から出土した銅鐸鉄型、金環遺跡の慶裕出土のゴボウラ製輪輪、磨製石鎌、更に、伝えられる青銅器鉄型出土等、貴重な資料も枚挙にいとまがない。地形の項で述べた平野部中位段丘に展開する須恵、岡本遺跡をはじめとする奴国を中心とした地理的対照しながらも、その影響下にあったものと考えられる。

古墳時代 古墳時代の月限丘陵は当調査地点を含む影ヶ浦古墳群、堤ヶ浦古墳群、持田ヶ浦古墳群に古墳時代後期の群集墳が認められる。影ヶ浦古墳群は総数8基からなる。内、1基丸山古墳は平野部へ離れて立地する。具体的な事が解らず消失した。また、1983年にこの古墳群の2基が調査されている。堤ヶ浦古墳群は1986年に土壇を含め20基を調査し、6世紀前葉からの造営が明らかになった。持田ヶ浦古墳群はA~Fの支群に別かれ、総数150基以上の最大規模のものである。2基が調査され、5世紀後半の小規模な堅穴式石室、6世紀後半の横穴式石室が構築された円墳が判明した。

月限丘陵北側の古墳群は時期を遡る5世紀後半~6世紀前葉のものが多く、2~3基で形成される。貝花尾1号墳、丸尾1号墳は堅穴系横口式石室、新立表2号墳、宝満尾古墳、北ノ浦古墳には屍床を有す石室が構築されている。



図.3 調査前状況（北東から）

II 調査の経過と方法

1. 調査に至る経過

当調査区は福岡市博多区上月隈109に所在する。周辺は土取り工事が進行し、地形の大幅な改変が行われている。今調査は白水誠之助氏から申請されたアドウ園造成工事に伴った埋蔵文化財調査依頼に基づく。

平成元年10月、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課の事前審査担当が現地踏査を行った。この時点では既に造成工事が行われ、調査区の大半が削られていた。この為、工事の即刻中止を申し出、以来、協議を重ね調査に至った。調査期間は平成3年1月20日～3月10日にわたる。

2. 調査体制

調査に至っては周辺の方々、造成工事施行の今井組の方々をはじめ関係各位の御協力をいただいた。

調査体制は下記に示す通りである。

調査主体 福岡市教育委員会 調査総括 埋蔵文化財課 課長 柳山純孝 第2係長 柳沢一男 調査庶務 埋蔵文化財課第2係 松延好文 調査担当 埋蔵文化財課第2係 荒牧宏行
調査作業員 大神吉彦 山部増人 森山初大 黒瀬千鶴 鳴ヒサ子 永松トミ子 松浦ウメノ
安高久子 山村スミ子 山下智子 山本代高 橋健志 車田希縁 田村隆俊 百田秀之 南
部後弘 大石智徳 千葉岳志 大元一弘 村上エミカ、その他多数の作業員の方々の応援を得た。
なお、後半の弥生貯藏穴調査に至っては田崎博之氏の御協力を得、さらに整理から報文執筆まで担当していただいた。

3. 調査の経過と方法

1) 現況地形測量

調査は現況地形測量の為のレベル移動とトラバース設定から始まった。現況は先述の通り、既に造成工事が行われていた為に、地形が崩れている。また、廃土が削平部分とその周辺の斜面に被覆していた。この為、地形測量では、等高線を入れられる範囲が限られた。

2) 調査区設定

造成工事計画は第1号墳、第2号墳が位置する丘陵全体を地下げするという事であった。従って、調査範囲は丘陵全域を考えたが、東～南東側の谷落ちする急斜面、南西側へ延びる急斜面は地形的に遺構が遺存しないものと考え除外した。前者については、廃土の被覆除去が困難である事、後者については、3本のトレンドで遺構が検出されなかった事も理由である。設定した調査範囲面積は1,113m²である。

3) 表土剥ぎ

表土剥ぎは重機を用いて行った。調査区南側の緩斜面の表土層植上剥ぎ取り、中央部の廃土

除去、北側の客土除去が主な作業であった。調査区北部は地形的に鞍部の低くまつた部分で、以前、第2号墳石室が露呈していた。しかし、この調査時には墳丘、石室ともに客土下に埋没し、その位置は全く判らなかった。この表土剥ぎにより再び第2号墳が露見できた。

4) 古墳調査

調査した古墳は2基である。第1号墳の調査を先行した。第1号墳清掃時に造成工事で壠削した断面に構造が確認された。これが貯蔵穴検出の最初であった。以後、調査期間の制約から、墳丘盛土除去に重機を使う等粗い方法も用いた。

5) 貯蔵穴調査

検出された貯蔵穴は総数57基に及ぶ。古墳の発掘作業が概ね終了した時点で、調査区南側の緩斜面のものから発掘作業を始めた。地山のバイラン土に黒色腐植土のプランが明瞭に確認されたものもあったが、そのほとんどは、地山と同じバイラン土が埋積していた。故に、調査区中央部において、造成工事による廃土の被覆した地山に残る貯蔵穴を当初、地山の擾乱と誤認していた。踏査区南側の緩斜面の発掘が進行するに従い、中央部の貯蔵穴の全容が明らかになってきた。しかし、古墳2基の調査で開始した調査期間には無理があり、また貯蔵穴の2m以上の人為による掘削には危険を伴う事から、重機による半割作業も後半より併用した。

このように、後半の貯蔵穴発掘作業は慌ただしく進行したが、他、多くの調査員、作業員の応援協力を得、終了をむかえる事ができた。

6) 土層

削平をまぬがれ、腐植表土が残る調査区南側緩斜面では、表土下、層厚約10cmの明黄褐色砂質土（バイラン土の流出した2次堆積土）、地山の風化花崗岩土（バイラン）になる。貯蔵穴は總て地山まで下げて検出した。中央部の2m以上削平された地山は灰色～灰白色を帯び、白色の岩脈が著しく見られる。



図.4 貯蔵穴断面

III 調査の記録

1、古墳調査

立地 (図8, 11)

西側の平野部へ派生してくる丘陵先端部に2基の古墳が立地する。丘陵先端部は略南北方向約60m、南西約25mにわたる独立丘陵の地形を呈す。北側の鞍部の標高は約38m、頂点は標高約41mでその比高差は3mに達する。また南側への傾斜は標高36mまでが緩斜面で、更に南側へは急下降していく。

東西には両谷落ちの急斜面が迫る。

影ヶ浦古墳群には5基の古墳が確認されている。当調査外の他の3基は東側の谷落ちと池を挟み対面した尾根上に位置し、隣接する堤ヶ浦古墳群、特田ヶ浦古墳群のような集中的な古墳構築は見られない。

(1) 第1号古墳

上記の独立丘陵部の頂部付近に立地する。調査時には、丘陵の大半が造成工事によって削平されていた。第1号墳の墳丘も西側の約1/3のみ遺存する。墳丘は標高39mから41m前後に及ぶと考えられる。

地山整形では丘陵頂部周縁を円形に堀削し、さらに、周溝を巡らしたと考えられる。周溝は遺存する西側では全周する。幅約2m、断面U字形で、西側の上端は、急斜面の為に一部流失する。墳丘規模は復原で径14、5mを測る円墳である。

盛土は旧表土と考えられる黒ボクの上に行われる。(図15) 黒色土やバイラン土による細かい版築が認められる。図示した旧表土、盛土の落ち込みは下部に弥生時代の貯蔵穴が構築されていた事による。内部主体については全く



図.5 第1号墳、墳丘遺存状況（北から）



図.6 第1号墳、墳丘遺存状況（東から）

不明である。

出土遺物（図9、26）

図示したものは總て第1号墳周辺に散乱していた表探資料である。

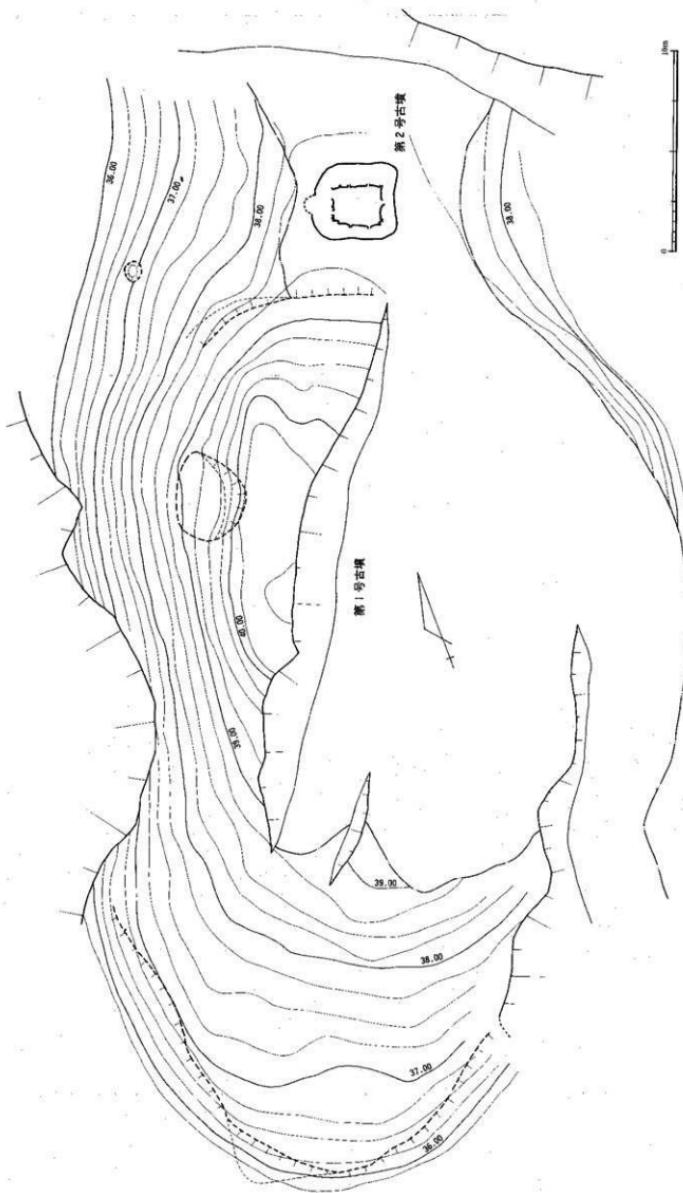
1は復元径14.4cm、器高4.4cmを測る。天井部外面の回転ヘラ削り調整は1/2弱である。天井部と口縁部の境に浅い沈線を有す。口縁端部は若干外反する。2は受部径16.1cm、器高4.8cmを測る。底部は平坦に近く、回転ヘラ削り調整は1/2弱である。3の高环脚部は広がった裾部の一部までカキ目が施される。上位に形態化した線刻状のスカシが3方に入るが貫通していない。スカシ下に2条の沈線を巡らす。4の無蓋高环は环部外底に2列にわたって櫛歯の刺突文様が施される。脚部中位までの外面にはカキ目が施され、線刻状のスカシが3方に入る。このスカシは下位のみ貫通している。下方の裾部には長方形の小スカシ窓が伴う。復元口径11.0cm、器高4.0cmを測る。5は無蓋高环の口縁部である。口縁部と底部の境に突堤状の段を有す。6は端部を下方に折り上げる。屈曲の形状や端部から、脚部と解した。7は復元口径24.0cm口縁部を横に折り上げ肥厚させる。端部の後は鋭く、上端面は平坦である。体部外面は平行タタキ後カキ目を施し、内面には大振りの円弧のアテ痕が残る。8は胴部最大径46cmを測る。体部外面に木目直交平行タタキを施し、上位に若干カキ目を加える。内面は同心円文のアテ痕が残る。

残る。



図.7 第1号墳埴丘断面（東から）

图 1 地况地形测量图 (1/200)



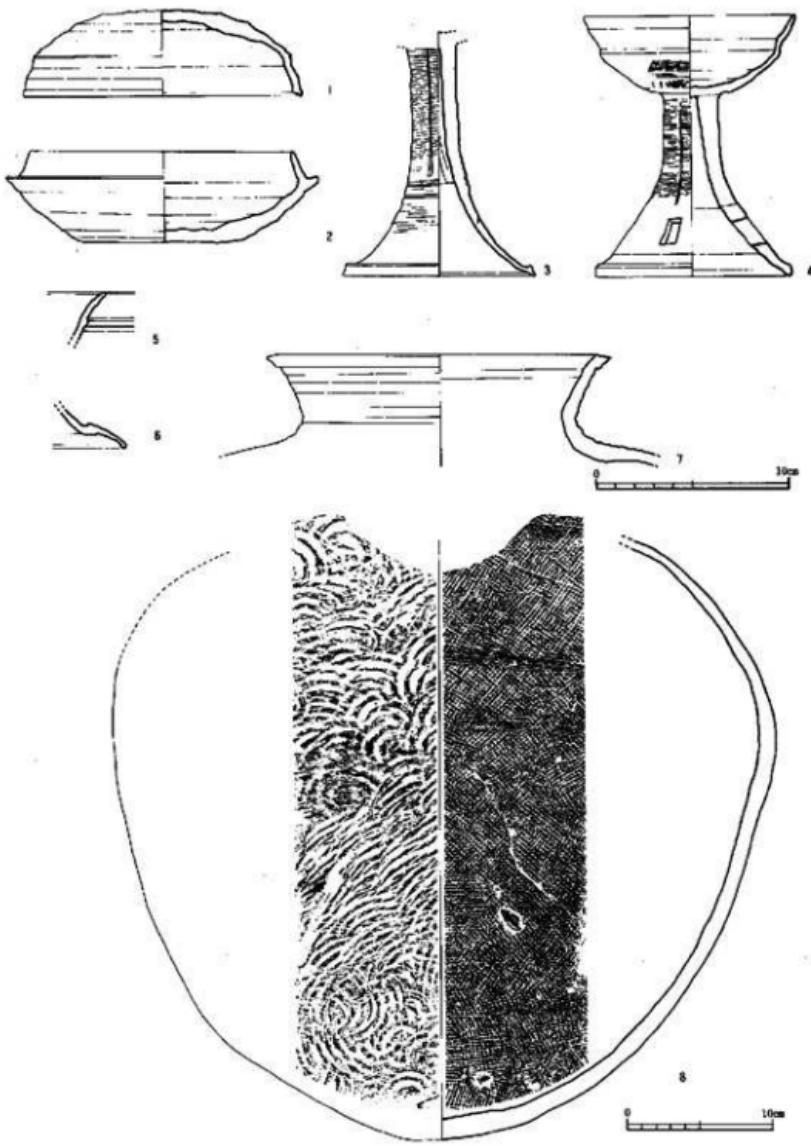


图. 8 第1号墳出土遺物実測図 (1/3)

(2) 第2号墳

立地と現状

第1号墳の北側、独立丘陵部がとりつく位置に占める。西側へ派生した丘陵と、独立丘陵部との間の鞍部で、東、西には谷落ちの急斜面が迫る。

現状では、以前確認できていた墳丘が客土に覆い尽くされ、全くその位置すら判り得なかつた。しかし、重機による客土除去作業により再び全景を露見することができた。

地山整形

露呈した地山から、第2号墳は南側から延びた丘陵斜面が、その南東部に達し、更に西側の谷の方へ緩やかに下降していく位置に構築されている。地山のレベルが高い第2号墳の南～東側にかけては、盛土が削平され、擾乱が一部地山にまで達する。この為、不明瞭な点を残すが、地山整形はまず南～東部にかけての平坦面確保の為の堀削、整地を中心に行われたものと考えられる。この範囲にわたっては地山整形により旧表土は削除された可能性がある。低所の西半部と北側では旧表土をそのまま残す。

周溝は馬蹄形状に巡らす。幅約2～3m、断面は皿状で遺存は悪い。地山のレベルが高い東側では削平を受け、北西部の斜面では流失している。この為、断続的な周溝プランの確認となつた。

墳丘

地山のレベルが高い南～南東部にかけては盛土が削平され、遺存が悪い。東側の縦軸土層では、擾乱による客土が地山に達し、墳丘盛土は遺存しない。第1号墳の位置から延びてきた丘陵斜面に位置する南側では、周溝が明確に検出できた。土層観察用トレーナーを延長し、周溝付近に流失した盛土から1号墳との先後関係を確認する事に努めたが、盛土の遺存が悪い為、判断し難い。低地である北側では最も良好に墳丘が遺存する。盛土は旧表土の上に直接行われる。横軸土層断面に細かい版築が認められ、20層のわずかな高まりも観察された。これが周堤状に



図.10 第2号墳地山整形（北東から）

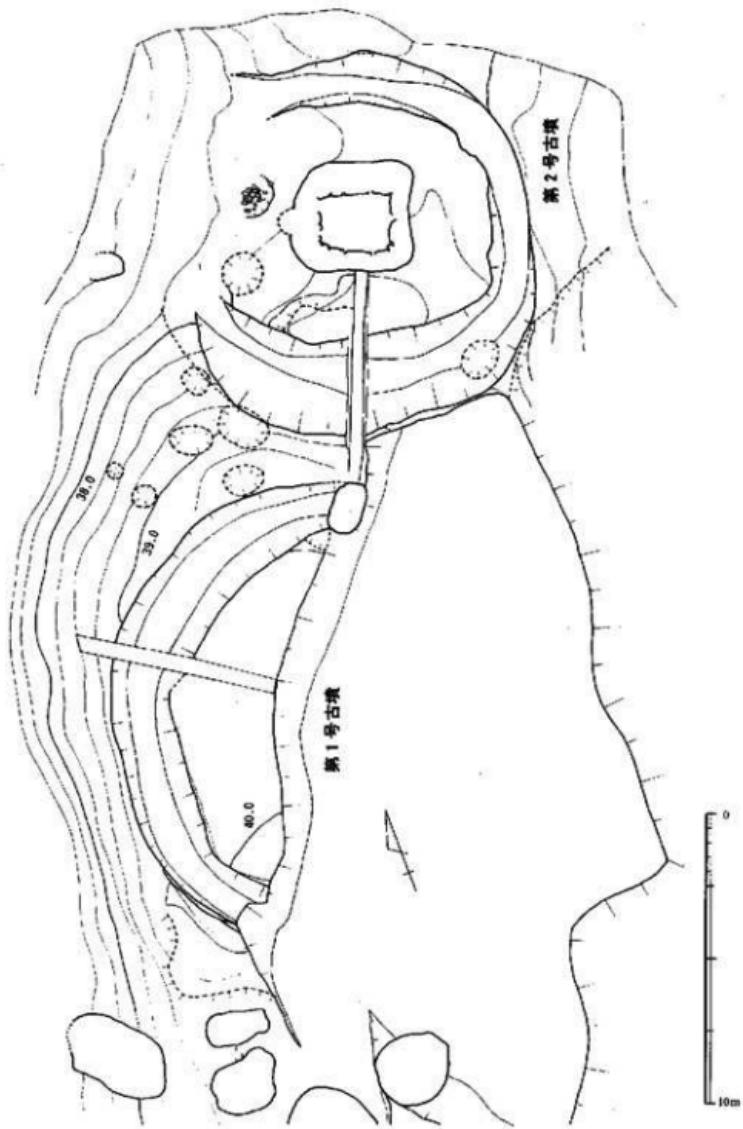


图.11 第1号坟·第2号坟地山整形测量图 (1/200)

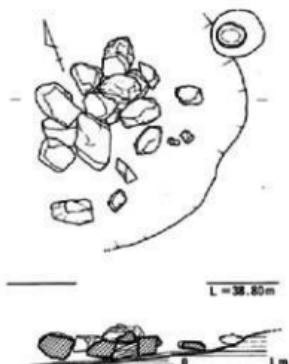


図.12 第2号墳丘内集石実測図 (1/30)



図.13 第2号墳丘内集石 (北から)



図.14 第2号墳横軸土層断面 (西から)

なるものかは断定できない。後述するが墓壇の堀り方は、盛土を切っている。従って地山整形後、第2号墳の北西部では整地、平坦面確保を兼ねた盛土構築作業が始まったと考える。

上記のように盛土の遺存が悪く、墳形が不明確であるが、周溝を含め判断した墳形、墳丘規模は南北約9.0m、東西9.4mのやや楕円形状のプランである。

墳丘内集石

表道部から北西に離れた位置で検出された。盛土除去作業中、旧表土の上面付近で集石を検出した。集石の上面は盛土中に達し、基底は旧表土中にある。掘り方の検出に努めたが集石周辺にも黒ボクが広がり、そのプランは不明であった。15~30cmの転石、割石は石室に用いた同じ花崗岩砾である。石材は片寄って集石し、西側へわずかに落ちていく。付近に土師器壺1個が埋置されていた。

(5) 石室 (図16~21)

墓壇

北側から西半部にかけては旧表土を切って掘りこまれている。特に、北側にかけての低所では40cm以上の盛土途中から掘削する。南側～南東部にかけては地山整形時の整地面から掘り込まれたものと考えられる。墓壇プランは漢道部にやや張り出す長方形を呈し、長軸4.35m、短軸3.75mを測る。基底面にかけては直に掘り込まれる。

石室

内部主体は主軸方位をN-69°-Wにとる両袖单室の横穴式石室である。奥幅193cm、前幅159cm、右壁長228cm、左壁長240cmを測る。奥幅に対し、前幅がやや狭い羽子板状プランを呈す。

奥壁には高さの異なる大振りの石材2を腰石に配し、右隅角に小振りの割石を充填し、固定させる。低い腰石の上面のみに小振りの石が残存する。右側壁は3個の腰石を配し、2段目には、大きめの石材2が使われ、その間と奥壁との隅角側には小振りの転石、割石を用いる。左側壁には腰石に大振りの石材3が配され、袖石側に小さめの石材1を加える。2段目には腰石より大きい横長石材1が、奥壁の腰石をはさむように配置される。隣接する2段目の割石1は、この大振りの石材の下で固定している。

右側壁、左側壁の2段目の上面高さはほぼ同じで、敷石からの高さ約65cm



図.16 第2号墳石室全景（西から）



図.17 第2号墳石室右側壁（北から）



図.18 第2号墳石室左側壁（南から）

を測る。また、奥壁の高い櫛石上面もほぼ合っている。

床面には5~30cmの円ないし角礫を敷く。敷石は1面のみであり、少し乱れはあるものの、ほぼ全面に残る。敷石を除去した面から地山まで厚さ5cm程の黒色土混じりの明黄褐色バイラン土の堆積が見られ、若干墓壇基底部を整地した可能性がある。

左右両袖石は欠失する。右袖部には、櫛石の玄室側の側縁に嵌めた割石が残る。袖石を固定させたものか。その石材の背後も抜き取られ、周囲に根固めの小礫が弧形に残る。右側壁から櫛石までの右袖部の長さは50cmを測る。

左側部の石材は皆無である。その抜き穴は櫛石に沿って検出された。左側壁から櫛石までの長さは35cmを測り、右袖部に比べ15cm短い。

櫛石は下段に扁平な割石3個を並べ、上段に石材を更に重ねている。右袖側の上段の石材は欠失している。下段の3個の櫛石の幅は70cmを測る。

(6) 前庭部

前庭部は左右両壁に各2個、長径45cm程の石材をハの字に置く。石材の下底は若干浮いた帖り石で、玄室に向かって下降する。淡門幅は70cmを測る。

帖り石に続く前庭部は盛土後の掘削による。櫛石に向かって緩やかに下降していく。盛土の遺存が悪い為、淡門より115cmの延長のみしか確認できず、その端部は削平され弧形を呈す。



図.19 第2号墳前庭部（南東から）



図.20 第2号墳前庭部土層断面（南西から）

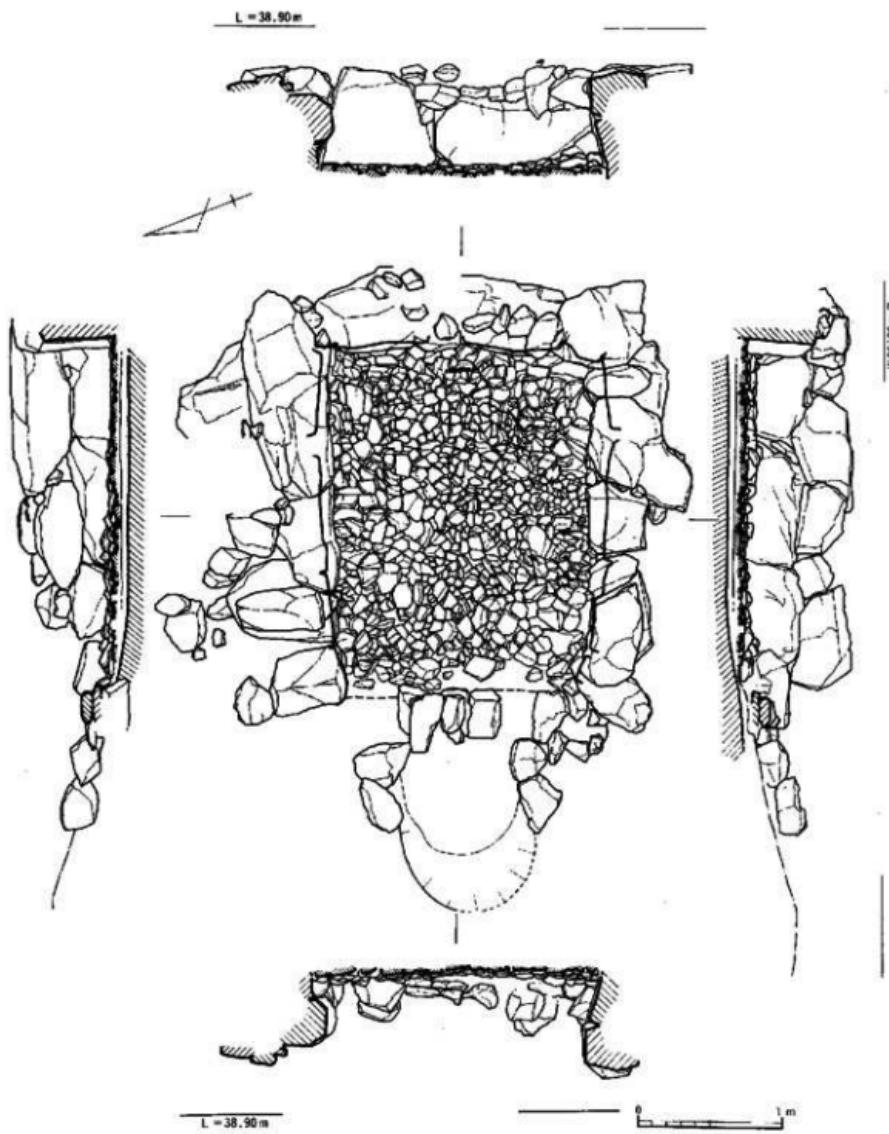


图.21 第2号墳石室実測図 (1/40)

出土遺物

鉄器 (図22、25)

総て玄室内から出土した。16の刀子は奥壁際中央部から、他の鉄器は右側壁中央に集中する。9は柳葉形の鎌身部である。鍔が著しく断面形は不明瞭であるが両丸と考えられる。茎部が銹着している。10は先端部が欠損していると思われる。茎部の断面形は大きく1辺が6~7mmを測る。11は鎌である。刀部にかけて彫れている。12~14は茎部、15は用途不明で弯曲している。16の刀子は全長推定14.5cmを測る。茎部に木柄が銹着する。

滑石製品

17は石室右裾部付近の表土から出土した。滑石製紡錘車である。径6.0cmを測る。18は墳丘南西裾付近から出土した勾玉である。全長4.4cmを測る。

土器

20は周溝東部、24は周溝北側、25は墳丘北西部の盛土中から出土した。他は2号墳周辺からの表採である。

壺 19は口径13.0cm、器高4.6cmを測る。天井部の回転ヘラ削りは1/2弱である。天井部は丸く口縁部との境は不明瞭である。この境には沈線が巡る。口縁端部は凹む。天井部にヘラ記号を有す。20は天井部と口縁部との境に段を有す。口縁端部は凹む。21は受部径13.7cmを測る。内面は回転ナテ調整を施し、不整方向のナテ調整はない。立ち上りの中位に弱い屈曲が認められる。外面には回転ヘラ削り調整が全体の1/2以上まで施される。22は受部径14.4cm、器高4.7cmを測る。底部は平坦を為し、立ち上りは直立ぎみである。外底部の回転ヘラ削りは1/2強に反ぶ。内面立

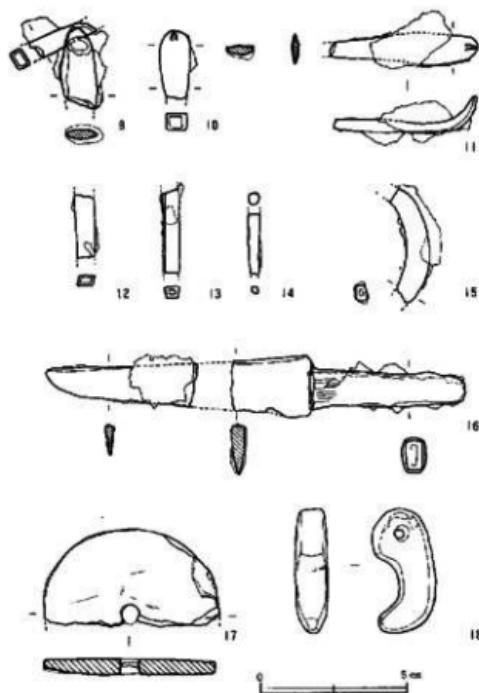


図.22 第2号墳出土 鉄器・石器実測図 (1/2)

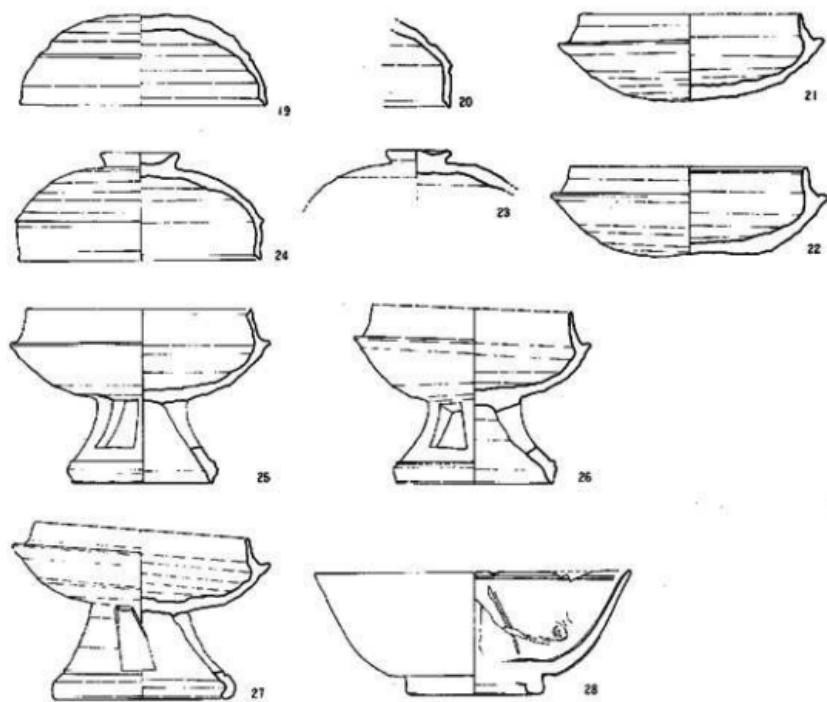


図.23 第2号墳出土遺物実測図 (1/3)



ち上り端部には沈線ないし段が巡る。内底部に同心円のタタキ痕がわずかに残る。

23は宝珠形のつまみが付く蓋である。天井部は丸みを帯びた器形である。出土した須恵器の中で最も新しいものである。

高杯 24の蓋は口径12.4cm、器高5.6cmを測る。天井部と口縁部の境には段を有し、その下は沈線状に座む。外面の口縁端部近くは若干、外反し端部は内傾した平坦面を呈す。外面の回転ヘラ削りは2/3に及び、内面は回転ナデ調整が施される。

25は復原口径13.4cm、器高8.9cmを測る。環部立ち上り端部は若干凹み、内傾する。脚端部は下方に折れ、断面三角形を呈す。脚部には台形の三方向スカシが入る。26も25と同器形であるが環部の立ち上り端が細まる。27の環部の立ち上り端部は丸く仕上げる。環部は25に比べ浅い。

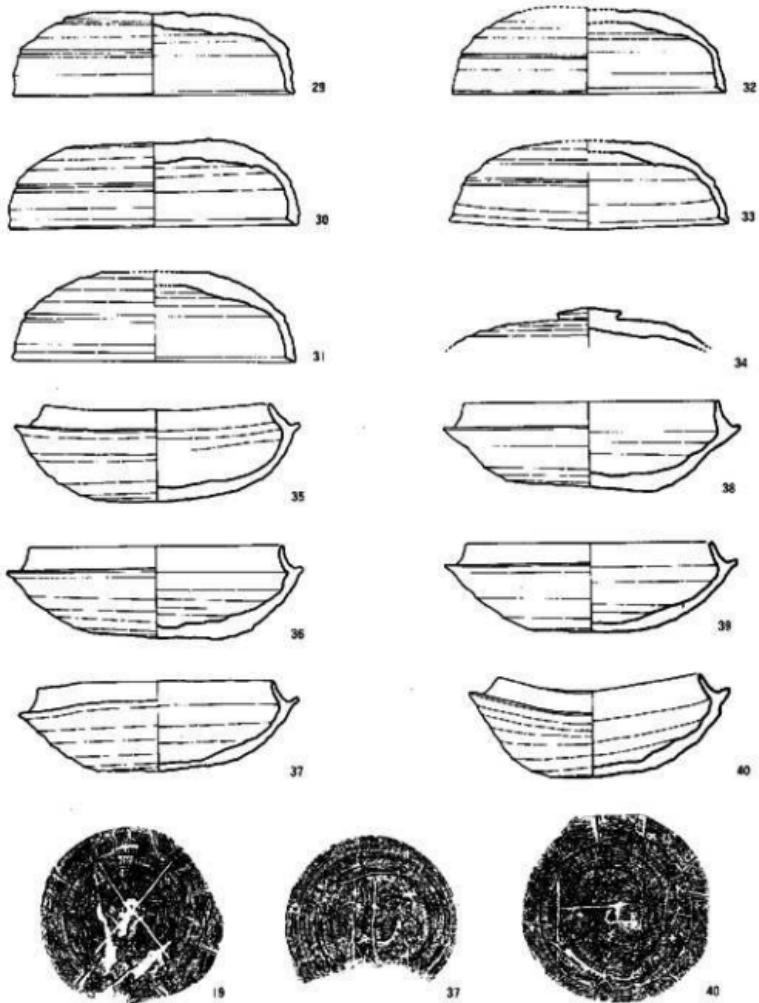


图.24 第1号・第2号墳 周辺表探遺物 (1/2・1/3)

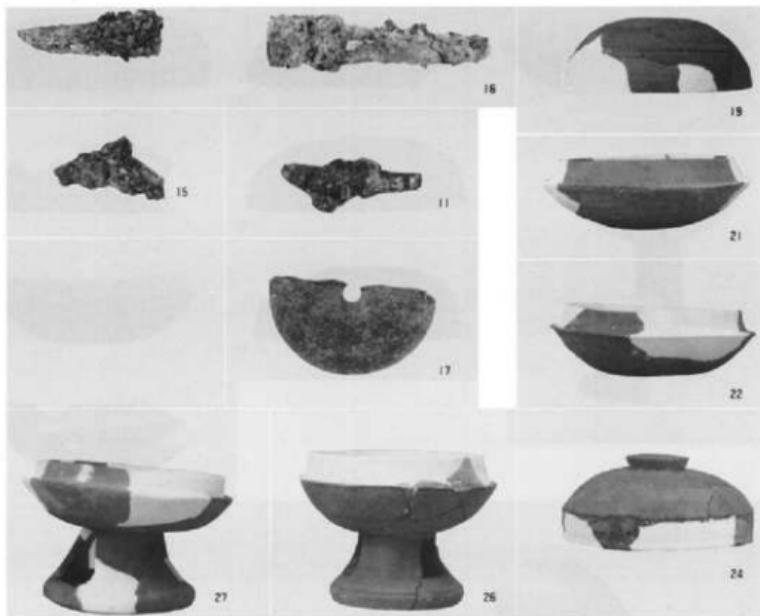


図.25 第1号・第2号墳出土遺物

い。25~27は灰色~淡青灰色を呈し軟質である。

青磁 28は龍泉窯系の輪花を有す壺である。

(3) 第1号 第2号墳出土遺物

丘陵部に散逸した土器で、第1号、第2号いずれのものとも断定し難い。

环蓋(29~34) 29、30の天井部は平坦であるが、他は丸みを帯びる。34は宝珠形のつまみを有す、出土土器の中では最も新しい型式である。34以外は天井部と口縁部の境に沈線を有し、29は段状に近い。口縁端部は29、33が窪み、29は沈線が巡る。回転ヘラ削りは概ね天井部の1/2に及ぶが、30は2/3に近い。内面天井部には不整方向のナデが施される。

环身(35~40) 35、37、40は焼き歪みが著しい。38の底部が平坦に近い器形であるが他は丸みを帯びている。38の立ち上りはやや厚く、直立ぎみにのび、端部は丸く仕上げる。他の立ち上りは内傾する。回転ヘラ削りは底部1/2ないしそれ以下に施される。

その他41、42は弥生時代の遺物であろう。41が硬玉製勾玉で頭部は扁平をあす。42はガラス製管玉である。

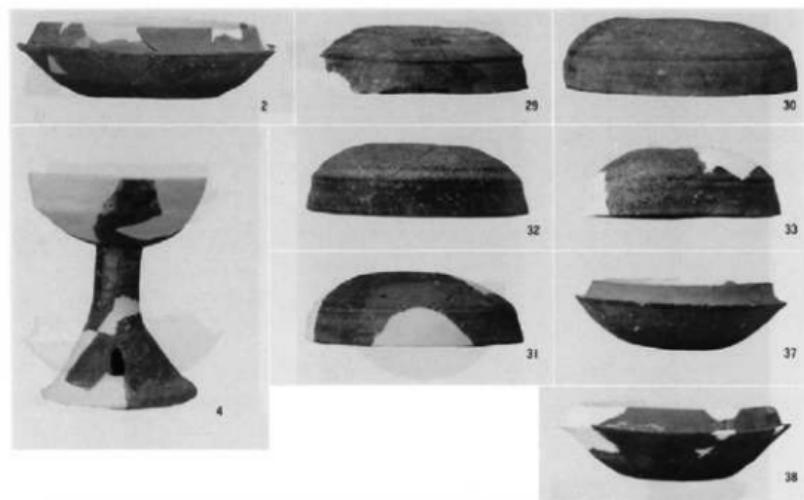


图.26 第1号・第2号出土遺物

2 弥生時代の遺構と遺物

丘陵頂部の1号墳の地山整形面を調査中に、弥生土器の破片が出土し、該期の遺構があることに気が付いた。調査の結果、これらの遺構には、貯蔵穴・土壙・小穴（ピット）が含まれる。ただし、調査期限が遅り、その延長も難しい状況になったため、調査区の西側斜面と2号墳周辺は、地山面をやや深めに掘り下げて、遺構を確実に検出することに努め、一部の貯蔵穴は危険防止のため、バック・ホーで半裁して調査を進めることとした。かなり慌ただしい調査となつたが、弥生時代の遺構のひろがりを、ほぼ確実に捉えることができた。弥生時代の遺構は、丘陵頂部、南側と東側の斜面上に集中している。

各遺構は、検出順に遺構番号として01から70までの通し番号を与え、各遺構の種類を貯蔵穴にS U、土壙にS K、小穴にはS Pの遺構略号を冠してあらわした。ただし、58号遺構は欠番である。検出した遺構は69基で、各種類別の遺構の基数は、以下のとおりである。出土遺物は、遺構の数に比べ、出土量が少ない。以下に報告する遺物が、遺構に伴うのはすべてである。

遺構の種類	略号	遺 構 番 号	基 数
貯蔵穴	SU	01~20・22~29・31~33・35・36・38~57・59・67・68	56
土壙	SK	21・30・34・37・60~62	7
小穴	SP	63~66・69・70	6
欠番	.	58	

(1) 貯蔵穴

総計56基が検出されたが、調査期間の関係から、SU-67・68は遺構上面を確認したのみである。また、SU-24~26・54は完全に床面まで掘り下げていない。そのため、完掘した貯蔵穴は50基である。

さらに、貯蔵穴の埋土は、ほとんどが上部まで地山（基盤）の花崗岩のバイラン土であり、遺構検出はかなり困難であった。調査の最終日、遺構検出面から地山を1.5~2.0mほど削った時点ではじめてSU-49~54に気が付いた。そのため、それらの遺構上半部の構造は、明らかでない。

S U - 01 (図. 30~33)

調査区の南端の丘陵先端に営まれ、SU-42と切り合っている。その先後関係は、両者ともに埋土がほぼ同質の花崗岩のバイラン土であるため判断できなかった。遺構の遺存状況はきわめて悪い。検出面から床面までの深さは、1.5~1.7mと比較的浅い。遺構の上部はかなり削平さ



図.27 莺生時代の遺構全景（南から）



図.28 莺生時代の遺構全景（東から）



図.29 影ヶ浦遺跡 弥生時代遺構配置図（縮尺 1/150）

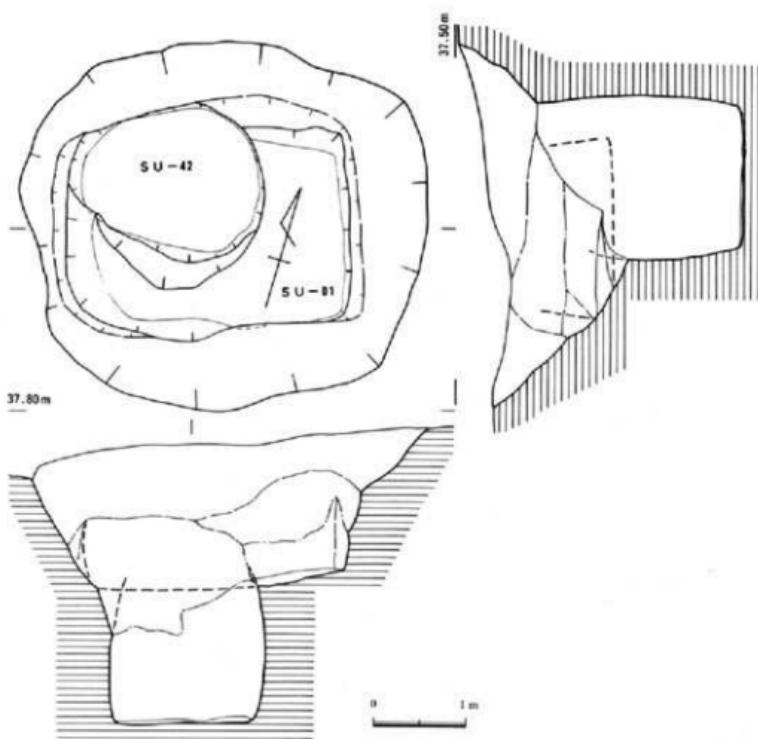


図.30 SU-01・42実測図 (縮尺1/60)



図.31 SU-01上部堆積の黒色土



図.32 SU-01・42 (東から)

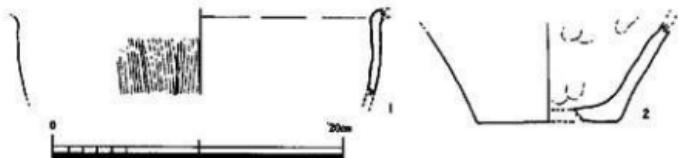


図.33 SU-01出土土器実測図 (縮尺 1/4)

れていると考えられる。

壁は床面近くまで倒壊している。上部には黒色の腐食土が堆積しており(図.31)、貯蔵穴が廃棄された後、かなりの間凹地となっていたと考えられる。床面の平面形は、不整な長方形を呈する。長軸長2.67m、短軸長2.01m、推定床面積は4.8m²ほどを測る。床面は中央部が低く窪んでいる。

埋土上層から甕(図.33-1)、中層から蓋の破片(2)が出土した。1は如意形に弯曲する口縁部・胴部の破片である。外面はハケメ、内面はナデ調整を施す。外面には煤が付着している。2は外面を丁寧なナデ仕上げしていることから、蓋の底部と考えた。内面には指頭痕が数多く見られる。弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階のものである。

SU-02(図.34~44)

調査区の南端、丘陵先端の南東側斜面上に當まれている。SU-41と切り合っているが、その先後関係はSU-41が先行するものと考えられる。南側からの入口部をもつ横口式の貯蔵穴である。本体部の床面は不整な長楕円形を呈する。長軸長2.20m、短軸長1.58m、床面積2.97m²を測る。

埋土は床面上0.5mほどに硬くしまった花崗岩の塊が堆積している。周壁が倒壊したものである。中層はサラサラしたしまりのない黄褐色砂質土である。その中から多数の土器と磨製石剣が出土した。また、埋土最上層は、長い間わずかな凹地となっていたと考えられ、黒色の有機質土がレンズ状に堆積していた(図.35)。

遺物は、いずれも埋土中層の黄褐色砂質土から出土している。ほとんどが土器で、完形に近いものが含まれている。しかし、細片化し完形に復元できたものは少ない(図.37~44)。

3は袋状口縁をもつ長頸甕である。外面は丹塗り磨研され、頸部には幅5mmほどの暗文帯が施される。胎土には細砂粒を少量含むが、粘土自体は精選されたものである。5・6は無頸甕である。ともに「く」字形に屈折する口縁部をもつが、5は6と比べ屈折度が著しい。5の口縁上面には2孔1組の小穴が焼成前に穿孔されている。4の蓋をするための紐穴と考えられる。口縁の内外面と胴部外面は丹塗り磨研され、胎土には砂粒をほとんど含まない。6は内外ともに器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明である。

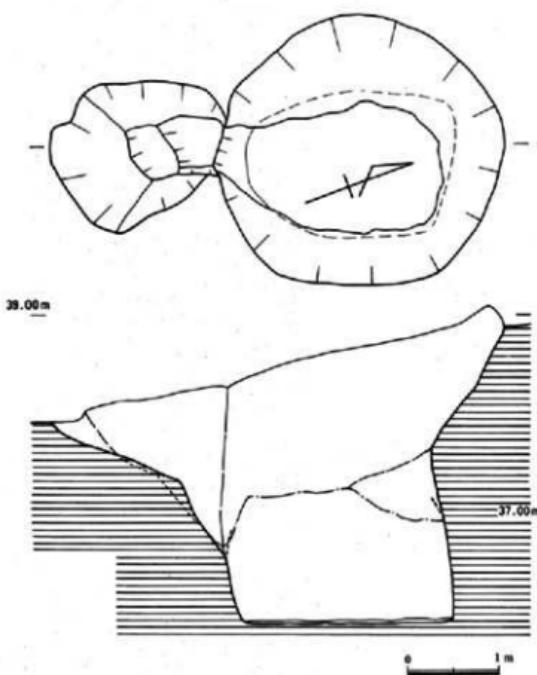


図.34 SU-02実測図(縮尺1/60)

4は蓋である。蓋部のほとんどを欠く破片のため、紐穴の有無は不明である。外面は丹塗り磨研が施されている。精良粘土を用いた丁寧なつくりである。

7・8は鉢である。ともに直口縁をもち、外面はハケメ調整、内面はナデ仕上げされる。7の内底にはヘラ状工具痕が残る。8は法量と底部の形状から、中形の甕をつくる途中で、胴中位で成形を中止して鉢に仕上げたものと考えられる。

9～11は、同規格の器台である。いずれも外面は2次的な火を受け、器面のあれが進み、赤っぽい色調に変化している。

12～21は甕で、いずれ

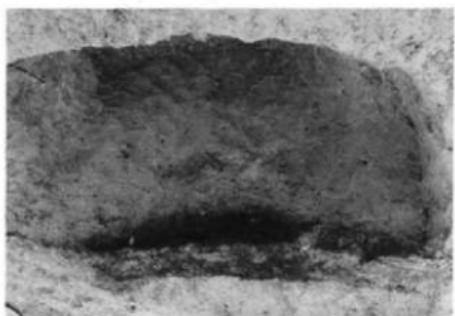


図.35 SU-02土層断面



図.36 SU-02石剣出土状況

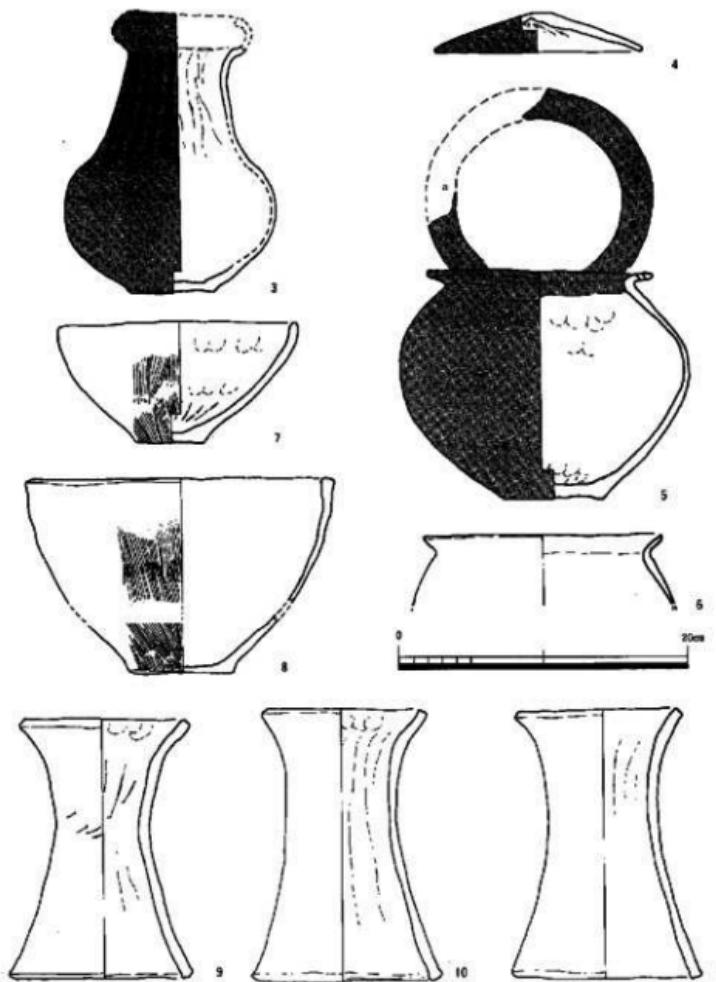


図.37 SU-02出七器実測図1 (縮尺1/4)

も「く」字形口縁をもつ。口径から大形品(15)、中形品(13・18・20)、小形品(12・16・19・21)に分けられる。また、20・21は、北部九州でも東半部の遠賀川流域～豊前地域に主に分布する甕である。口縁端部に強い横ナデ調整、あるいは細い粘土縫を貼付して、跳上げ口縁に作

る。22・27は甕の底部破片である。
26・27は他の平底であるのに対し、凸レンズ状に外底面が膨らむ。
27は21と胎土・色調が類似しており、同一個体である可能性が強い。

以上の上器は、弥生時代中期末の須恵II式土器新段階のものが主で、一部6・15・17・26・27などの後期初頭のものが含まれている。したがって、SU-02の時期は後期初頭に比定できよう。

この他に、貯蔵穴の横口部分の埋土中から弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定できるものが出土している(28-32)。SU-02の横口部分から出土していることから、先行して造られたSU-41の埋土上層中に、包含されていたものが混り込んだのであろう。調査時の取り上げ遺構にあわせ、ここで報告しておく。

28・29は、甕の胴部破片である。ともにヘラ状工具で文様が描かれている。28は胴部中央に2条の平行沈線文を巡らし、その上部に重弧文が描かれている。29は頸部と肩部の境に3条の平行沈線文を巡らし、その下に重弧文を描く。30は如意形口縁の甕である。外面は2次的な火熱を受け、器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明。内面はかなり丁寧なナデ調整で仕上げている。31・32は甕の底部破片である。

他に、土製投弾(33)と磨製石剣(34)がある。ともに埋土中層の黄褐色砂質土から出土し

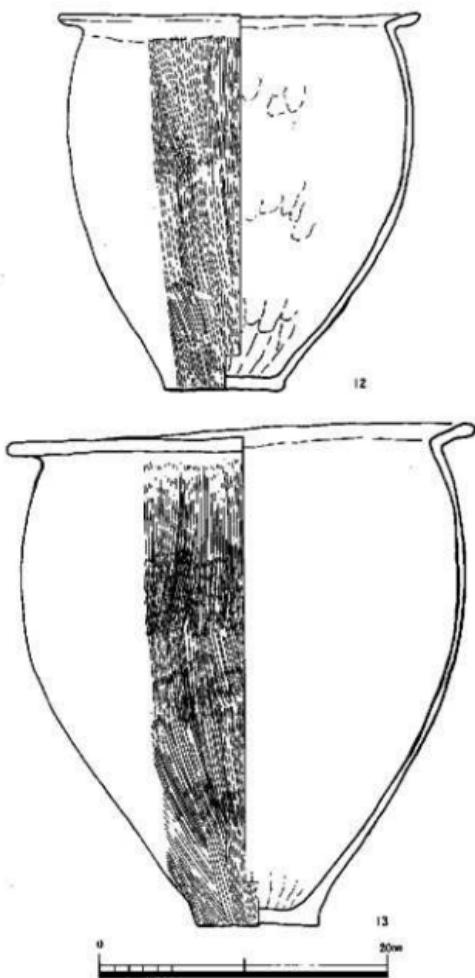


図38 SU-02出土土器実測図2 (縮尺1/4)

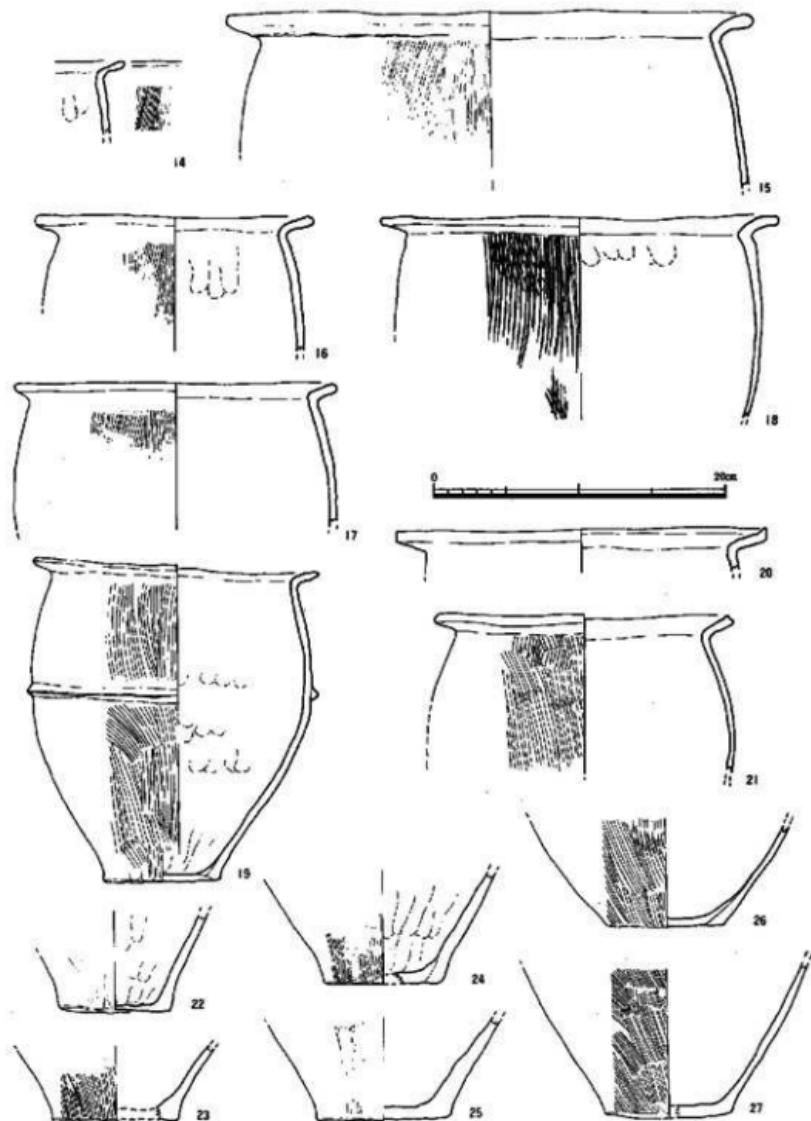


圖 38 SU-02 出土土器實測圖 3 (縮尺 1/4)

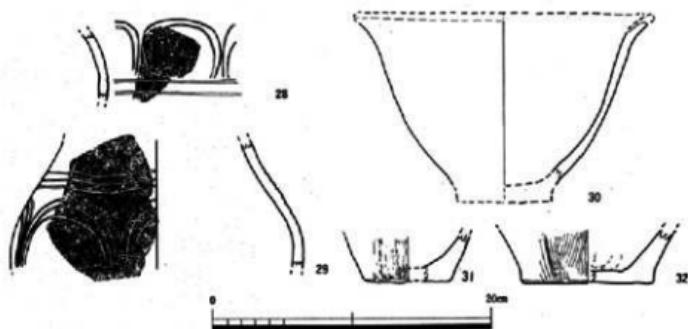


図.40 SU-02出土土器実測図4 (縮尺1/4)

ている。弥生時代中期末～後期初に比定できる。33は表面を丁寧にナデ仕上げする。一方の端部の磨滅が著しい。重量は13gを測る。34は磨製石剣の剣身破片である。

SU-03 (図.45~48)

調査区の南半部、丘陵頂部の平坦面から斜面にかかる所で検出した。造構上半部はかなり削平され、南側の壁の倒壊が著しい。床面は中央部を0.2~0.3m掘り下げ、まわりに幅10~60cmほどのテラス状の段を造り付けている。平面形はほぼ円形を呈し、直径1.82~1.97m、床面積2.92m²を測る。テラスからずり落ちたような状態で、土器片がかたまって出土した(図.47)。

出土遺物は弥生土器の破片のみである。35は甕の「く」字形に屈折する口縁部の破片である。内外面ともに器面の荒れが進み、調整の仔細は不明。36の底部破片は、外面をハケメ調整した後にナデ仕上げするが、胴部下半のひ



図.41 SU-02
出土投擲実測図
(縮尺1/3)

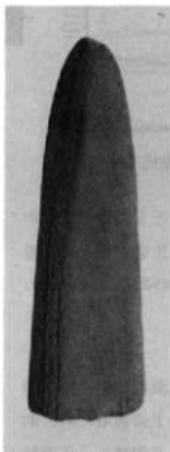


図.42 SU-02
出土投擲
(縮尺1/2)

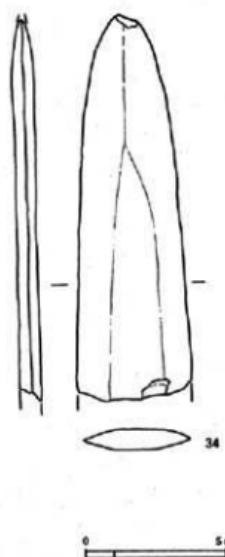


図.43 SU-02出土
石剣
(縮尺1/2)

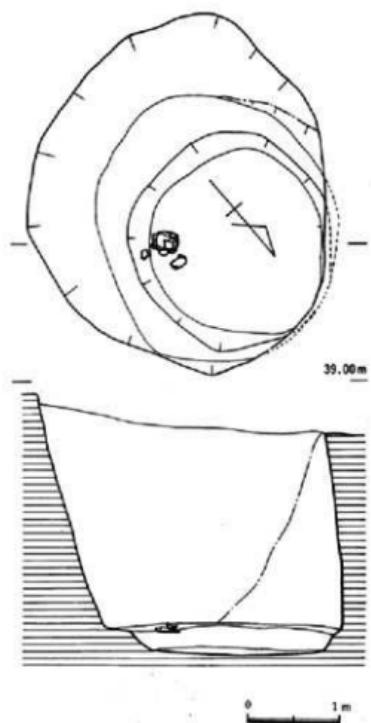


図.45 SU-03実測図 (縮尺1/60)

らき具合から壺と考えた。とともに弥生時代中期末の須恵II式土器新段階に比定できる。土器の出土状況も含め、SU-03の時期は該期に求めることができよう。

SU-04(図.49)

調査区の南西端、丘陵が急激に傾斜を増す斜面上に営まれている。急斜面上にあるため、削平が著しい上に、壁はほとんど倒壊し、床面付近がわずかに遺存するのみである。また、西側は完全に消失している。部分的に残った床面は、中央部付近がわずかに凹み、平面形は隅丸の



図.46 SU-03(北から)



図.47 SU-03遺物出土状況

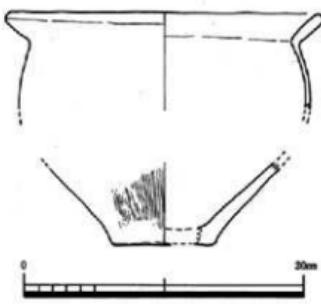


図.48 SU-03出土土器実測図
(縮尺1/4)

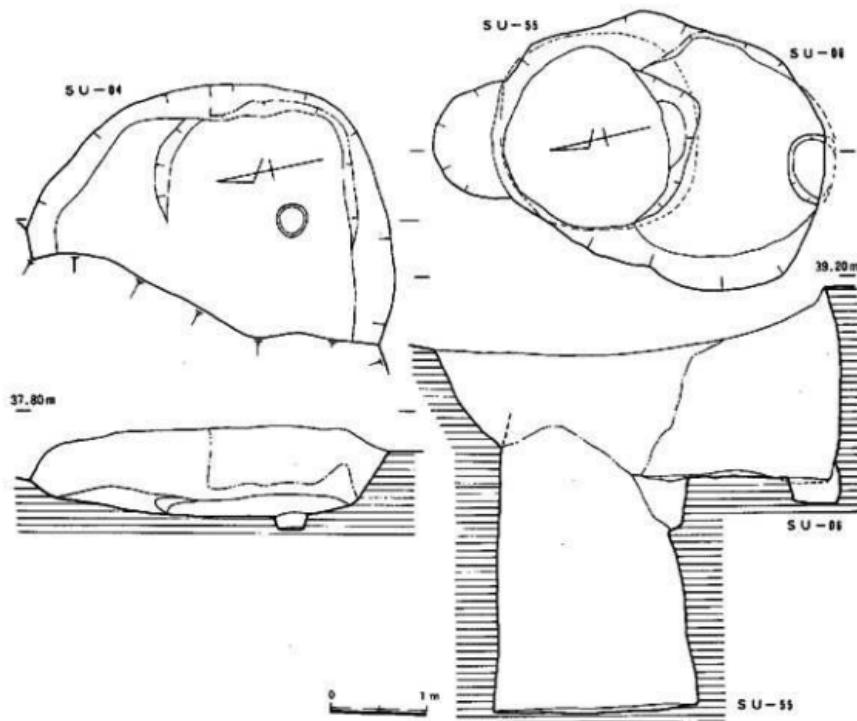


図.48 SU-04・06・55実測図 (縮尺1/60)

長方形と考えられる。残存長2.3m、幅1.85m、遺存する床面積は3.92m²で、本来5.2~5.5m²ほどと考えられる。また、床面には直径30~35cm、深さ17cmほどの小穴が掘られている。遺物は出土していない。

SU-05 (図.50・51)

調査区の南半部、丘陵頂部の平坦面から斜面にかかる部分、SU-03の北西側で検出した。北側にはSU-40が営まれている。堆土の中～上層部は、壁の崩落土が大部分をしめ、床面近くには炭化物の細片をわずかに含むバイラン土が堆積していた。

壁の遺存状態は悪く、北半部は床面近くまで倒壊している。遺存状態が比較的良好な南半部は、下半が若干ふくらむ。南東側の壁面には、間口75cm、奥行50cmほどの小穴が掘られている。また、北東側上端の掘込みは、この貯蔵穴に伴う階段状のテラスと考えたが、他の遺構（土壙）

である可能性も残る。床面の平面形は長円形で、長軸長1.95m、短軸長1.68m、床面積2.69m²を測る。

床面の東側部分には、0.4~0.1mほど浮いて、人頭大から握拳大の礫が集積していた。礫群は北から南へ流されたような状態で検出された(図.51)。この他に、出土遺物はない。

SU-06(図.49)

調査区の南半部、丘陵頂部の平坦面から斜面上にあり、SU-03の南東側で検出した。当初、2段掘りの貯蔵穴で、1段目の北側の床

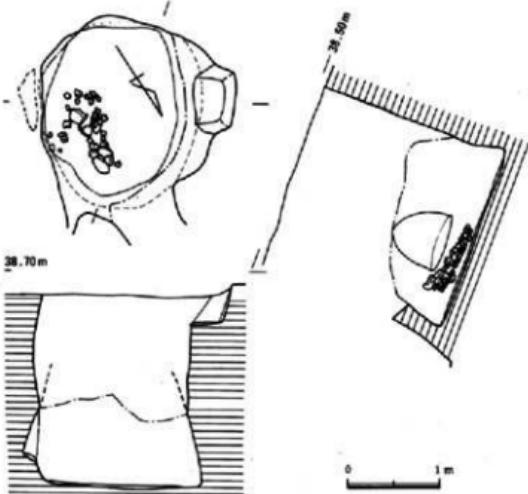


図.50 SU-05実測図(縮尺1/60)

面から2段目を掘り込んだものと考えていた。しかし、2段目の奥壁にあたると考えた壁は、遺存状態が良く、ほぼ直線的にすばまっている。その角度から考えると、2段目を掘るために、1段目の北側の壁のはとんどを崩してしまうことになる。こうした推定は無理があろう。むしろ、2基の貯蔵穴が重複していると考えた方がよさそうである。そこで、南側の1段目とした部分をSU-06、北側の2段目とした部分をSU-55とした。両者の先後関係は不明である。

SU-06の床面は直径2.2~2.4mの円形を呈する。残存床面積は3.1m²で、本来の床面積は4.0m²であろう。南側の壁に接して梢円形の小穴を検出した。小穴の長径は60cm、短径は45cm、深さ25cmを測る。遺存状態の良い南側の壁は、ふくらみをもってすばまる。出土遺物はない。



図.51 SU-05床面直上の礫群

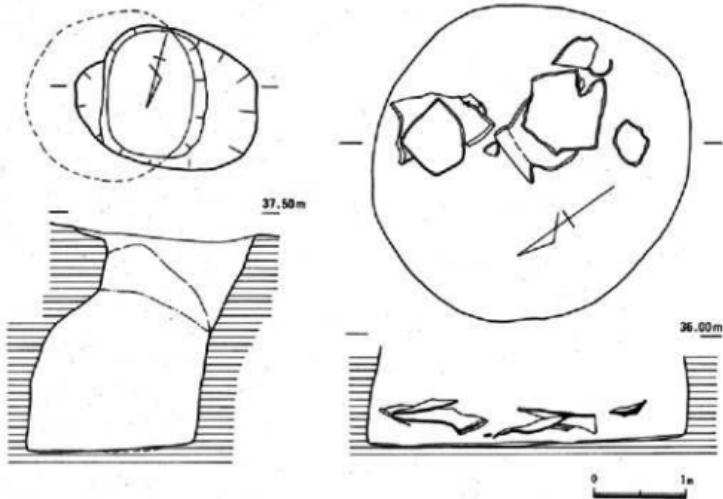


図.52 SU-07実測図 (縮尺1/60・1/30)



図.53 SU-07遺物出土状況 1

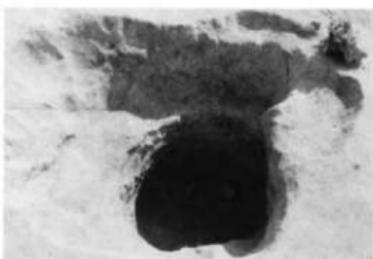


図.54 SU-07遺物出土状況 2

SU-07(図.52~55)

調査区の南西端の斜面上に営まれている。南東側にはSU-52~54、北西側にはS P-69-70がある。埋土の上～中層部は、壁の崩落した硬い花崗岩の塊と、黄褐色砂質土が互層状に堆積し、下層の床面近くは炭化物の小片をわずかに含む黄褐色砂質土である。壁は西側がかなりオーヴァーハングしてすばまるが、東側はほぼ垂直に立ち上がる。造構上半部はかなり崩れてい るものの、東側に偏らせて貯蔵穴の入口が設けられたと考えられる。床面の平面形は、ほぼ円形を呈し、直径1.67~1.8m、床面積2.35m²を測る。

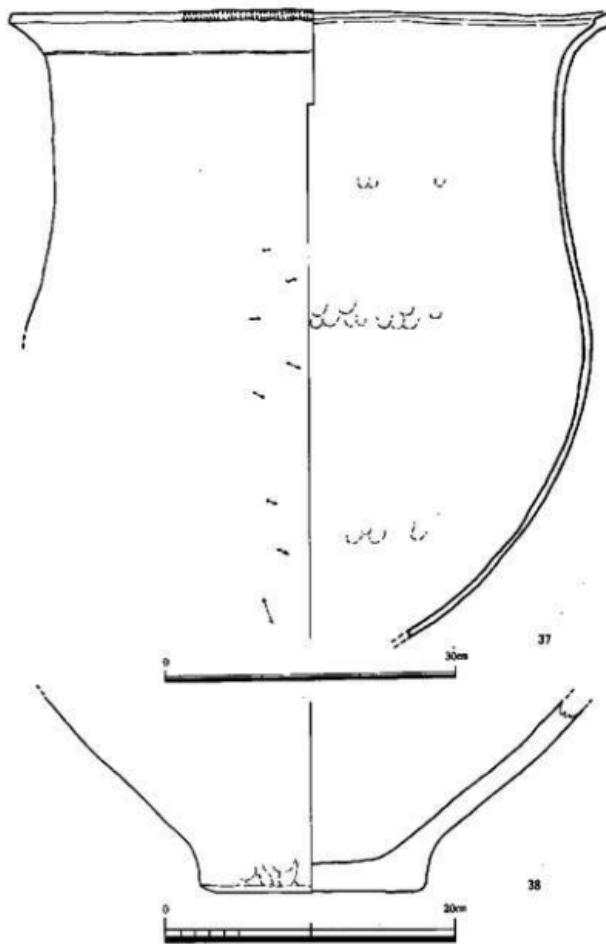


図.55 SU-07出土土器実測図（縮尺1/6・1/4）

床面にほぼ接するように土器が出土した。ただし、東側の壁がかなり強くオーヴァーハングし、危険な状態となつた。そのため、一旦、東半部を床面まで掘り下げ、実測と写真撮影を行い（図.53）、その後に遺構上半部を崩して西半部を調査して出土遺物を取り上げた。土器は大形破片が散乱した状態で出土している。貯蔵穴が廃棄された後に、投げ込まれたものと考え

られよう。

出土遺物には大形壺が2個体分ある。37は腰柵によく転用されるタイプの壺である。外面は胴部を横方向あるいは左上がりの斜方向の研磨調整を、頭部には縱方向の丁寧なナデ調整を施す。口縁部周辺は横ナデ仕上げする。内面はナデ調整で仕上げられるが、数ヶ所に帯状に指頭痕が残る。38は、当初37と同一個体の可能性を考えたが、焼成・胎土ともに異なっており、別個体と考えた。外面はナデ調整が施され、底部側面には指頭痕が残る。内面は器面の剝離が著しい。

これらは、弥生時代前期末の板付II式土器新段階に比定できる。SU-07の時期も、該期の頃と考えてよかろう。

SU-08(図.56~60)

調査区の南西部のSU-04の北東側で検出した。急斜面の丘陵西側が、丘陵の先端に近づき傾斜が緩やかになった付近に営まれている。遺構上半部は大きく崩れ、下半部が残るのみである。南側の壁は膨らみをもってすぼまるが、北側はそれほど膨らまない。床面には直径35~40cm、深さ20cmほどの小穴がある。床面の平面形は不整な隅丸長方形で、長さ1.99m、幅1.59m、床面積2.69m²を測る。

出土遺物には弥生土器と土製投弾がある。当初、遺構の範囲が確定できず、壁を追って掘り進めていく過程で、埋土上層から39が出土した。もともとSU-08に伴うかは確実ではない。大形壺の口縁部の小片である。口唇部下端にハケメ工具

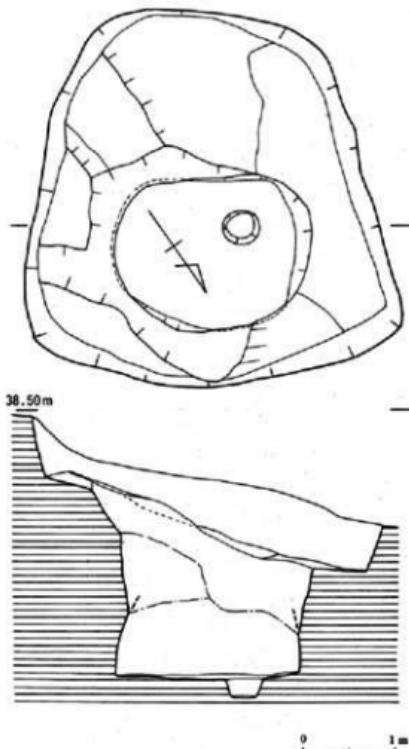


図.56 SU-08実測図(縮尺1/60)

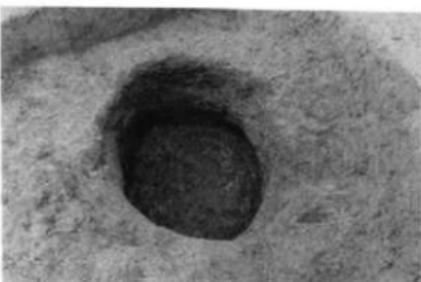


図.57 SU-08下半部の遺存状況

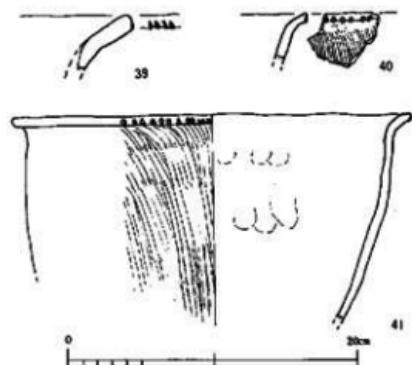


図.58 SU-08出土土器実測図(縮尺1/4)

の小口部を押捺してキザミを施す。40・41も、埋土上層から出土。壺の口縁部破片である。如意形口縁で、口唇部下端にヘラ状工具によるキザミが施されている。42は土製投弾で、上器とともに埋土上層から出土した。一方の先端部分を欠く。表面は研磨調整で仕上げられる。重量23.3gを測る。

以上は、弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定できる。

SU-09(図.61・62)

調査区の南半部、丘陵頂部から南側に下がった緩斜面上にある。周囲には、SU-03・06・40・55が営まれ、SU-55とは切り合っている。ただし、その先後関係は不明である。周囲の貯藏穴と比べ、それほど深くない。北側にテラス状の段が伴う。東側の壁をのぞき、造存状態は悪く、床面近くまで倒壊している。東側の壁から考えると、壁はわずかに膨らみながらすばまとと考えられる。床面はかなり北側に傾斜し、北壁に沿った部分が0.75~1.15mほどの円形に掘り下げられている。平面形は不整な長椭円形で、長軸長1.93m、短軸長1.45m、床面積2.35m²を測る。出土遺物はない。

SU-10(図.61)

調査区のはば中央部、丘陵頂部に営まれている。SU-27と切り合う。先後関係は不明である。また、西側にはSU-56が近接して営まれ、その間で小さな平垣面を確認した。壁は西側がわずかに開き、東側が膨らみをもってすばまる。入口部を東に偏らせて設けたと考えられる。そうであれば、SU-56の床面とほぼ同じ高さにある小さな平垣面は入口部の階段状のテラスで、SU-10は横口式の貯藏穴である可能性が高い。床面の平面形は不整な楕円形を呈し、長軸長1.72m、短軸長1.5m、床面積2.1m²を測る。

また、南壁の上半の小さなテラスは、壁のすばまり方と、遺構の上半部が1m以上削平され

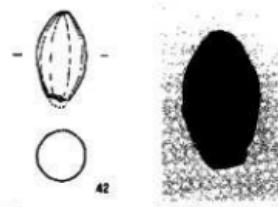


図.59 SU-08
出土投弾実測図
(縮尺1/3)

図.60 SU-08
出土投弾

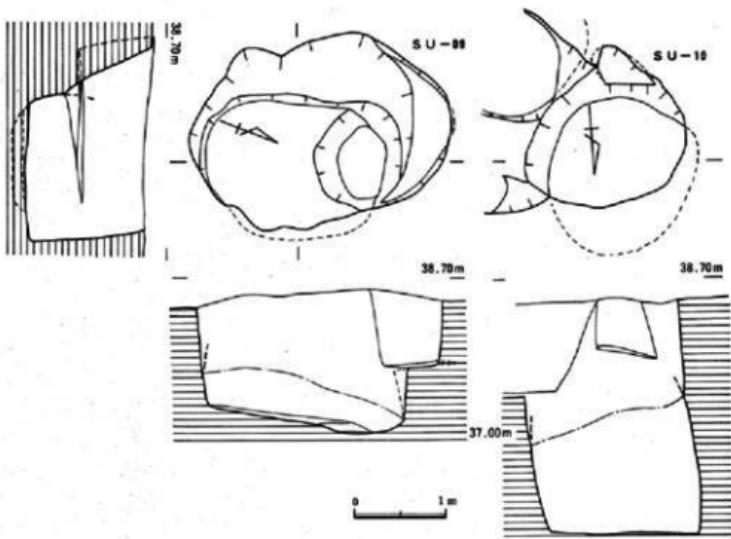


図.61 SU-09・10実測図(縮尺1/60)

ていることから、SU-10の入り口部分が想定される範囲外にでてしまう可能性がつよい。別の造構(土壙)であろうか。出土遺物はない。

SU-11(図.63~66)

調査区の中央部にあり、丘陵の頂部付近に営まれている。2段掘りの貯蔵穴で、造構検出面からの深さが5.6~5.8mを測る。周辺は1~1.5mほど削平をうけているので、本来は7mちかい深さであったと考えられる。そのため、上面から掘り下げるには危険な状態となった。そこで、2段目を一部掘り下げた段階で、実測と写真撮影を行い、その後に北側をバック・ホーで半裁し、2段目の床面まで調査を行なうこととした。

造構の遺存状態は、上部1mほどの壁の倒壊が著しいが、以下は比較的よい。1段目の壁は、かなりの膨らみをもってすばまり、床面はやや不整な円形を呈する。直径2.15~2.3m、床面積は2段目の入り口部分を含め3.68m²、これを除くと2.92m²を測る。埋土の上~中層部は、倒壊

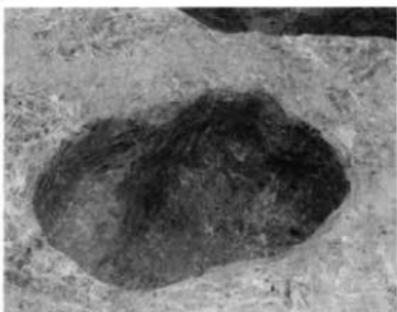


図.62 SU-09(西から)

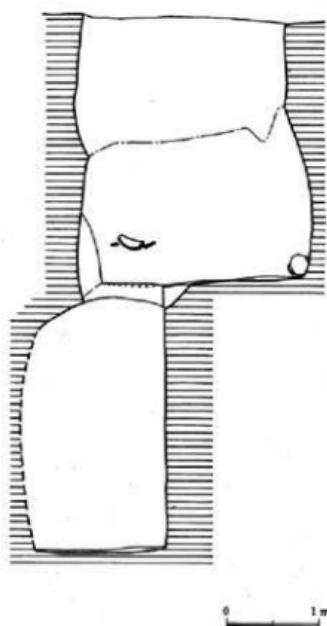
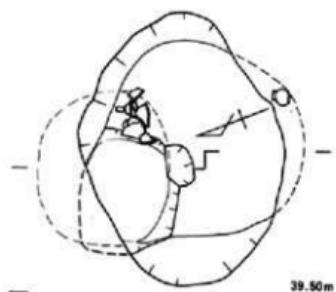


図.63 SU-11実測図(縮尺1/60)

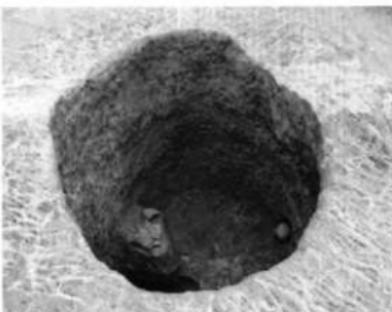


図.64 SU-11



図.65 SU-11 2段掘り入り口部分

した壁である花崗岩の塊が大部分である。下層には、花崗岩塊のほかに、炭化物の小片が混じる赤褐色粘質土や、黄褐色砂質シルトが堆積していた。

この1段目の床面の北側隅に、一部壁を削って2段目が掘り込まれる(図.65)。2段目は南側をほぼ垂直に掘り下げ、北側へ向かって掘り広げる。床面は、不整な楕円形を呈し、長軸長1.65m、短軸長1.4m、床面積1.94mを測る。埋土は赤褐色の粘質シルト、黄褐色や黄灰色の砂質土が縦状に堆積し、床面近くの黄灰色砂質土層には炭化物の小片がわずかに含まれる。

出土遺物には、弥生土器の壺が3個体分ある。43は、1段目の床面の南東隅で横転した状態で出土した、やや小振りの壺である。ほぼ完形の状態で、床面に接して検出されている。造構

上部の壁が倒壊して埋没したものであろうか。球形の胴部から緩やかに弯曲してひろがる口縁部がつく。口頸部の付け根付近に、先端の丸いヘラ状工具で3条の平行沈線文を巡らし、その下方の肩部に間隔をあけ3条の沈線を引き、間に二枚貝の腹縁を押捺して有軸羽状文を描く。施文は、かなりいい加減で、途中で羽状文の向きが変わる。

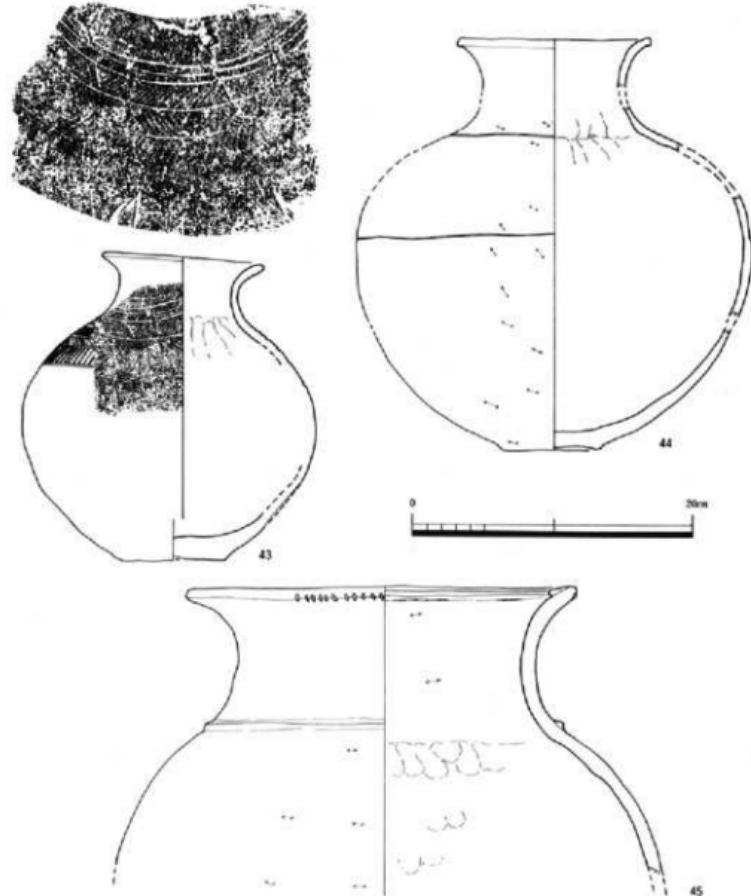


図.66 SU-11出土土器実測図(縮尺1/4、拓影1/3)

44・45は1段目の北東隅で床面から40~50cmほど浮いて、口縁~胴部破片が散乱した状態で出土した。2段目の入口部を一部覆うように出土しているので、貯蔵穴がある程度埋没した段階で廃棄されたのであろうか。44は中形壺であるが、かなり細片化し接合ができなかった。そのため、同一個体と考えられる破片を、図上で復元しており、若干器形が違っているかもしれない。胴部外面は横あるいは斜方向の研磨調整で仕上げられ、口頭部の内外面には横ナナ調整を施す。

45はやや大形の壺である。胴部下半を欠く。口頭部の付け根付近に断面三角形の凸帯を造らせる。口縁内面に粘土帯を貼付して肥厚させ、口唇部下端にヘラ状工具でキザミを施す。外面および口頭部内面は、横方向の研磨調整で仕上げている。

43は弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定でき、SU-11の時期は、該期と考えてよからう。

SU-12(図. 67・68)

調査区の中央部付近、SU-11の北東側、丘陵の頂部の東側に営まれている。また、東側にはSU-46・48、北西側にはSU-24がある。床面近くの東側に小動物の掘った横穴があり、若干掘りすぎたが、床面の平面形はほぼ円形で、直径1.6~1.95m、床面積2.33m²を測る。

東側の壁は大きく倒壊しているが、他の壁面はやや膨らみながらすばまる。埋土は花崗岩のバイラン土の塊が主で、他に赤褐色粘質土、黄褐色砂質シルトがブロックで混じる。出土遺物はない。

SU-13(図. 67・69・70)

調査区の中央部付近、SU-12の北東側、丘陵頂部から北東側斜面にかかる部分に営まれている。南側にはSU-46・48、北西側にはSU-24・26があ

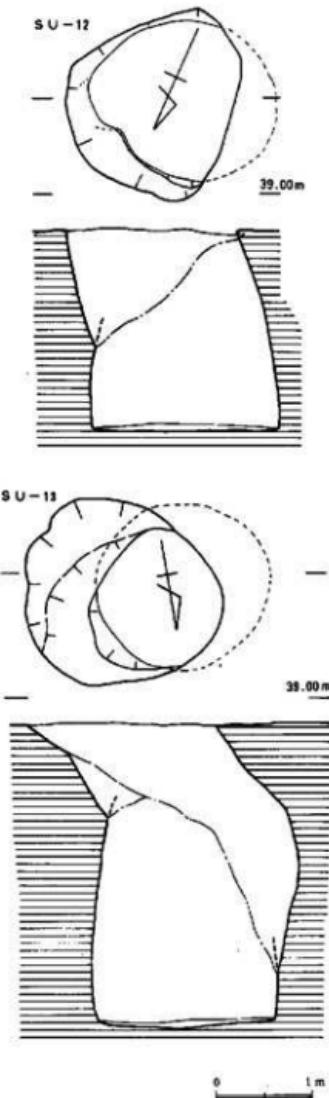


図.67 SU-12・13実測図 (縮尺1/60)



図.68 SU-12(東から)



図.69 SU-13半截状況

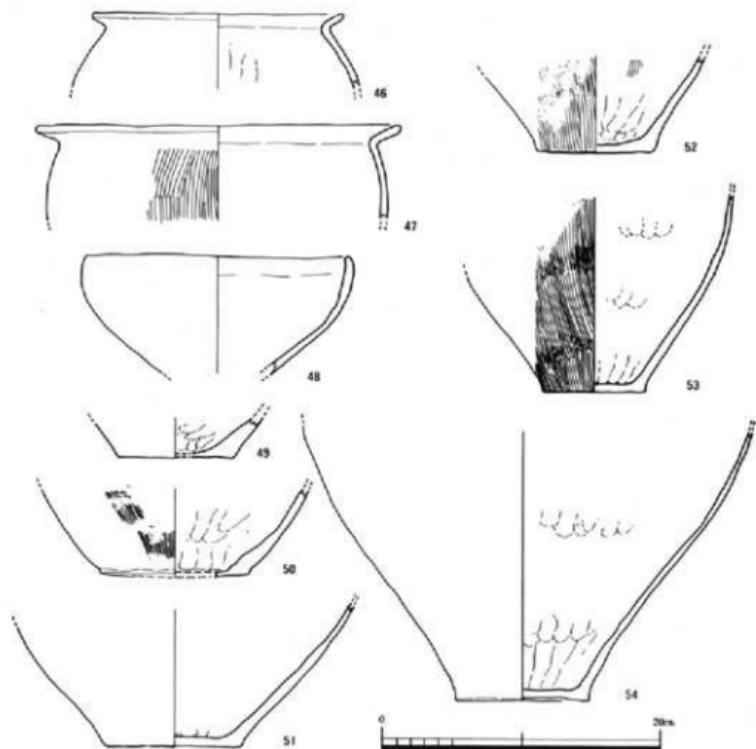


図.70 SU-13出土土器実測図(縮尺1/4)

る。掘り下げの途中、西側の壁がかなりオーヴァーハングして危険な状態となり、遺跡全体写真を撮影した後に、バック・ホーで西側を床面近くまで半截して調査した(図. 69)。

貯蔵穴内には倒壊した壁である風化した花崗岩の塊と、黄褐色砂質シルトや赤褐色粘質土が交互に堆積していた。下層部の床面近くには、炭化物を少量まじえた黄褐色砂質土が堆積していた。床面はほぼ円形で、直径1.7~1.8m、床面積2.4m²を測る。東側の壁は下半部が膨らみ、上半部がほぼ直線的にすぼまる。これに対して、西側の壁は遺存状態が悪いが、急激にオーバーハングしてすぼまる。床面と遺構上面がかなりズレており、入口部を東に寄せて設けたと考えられる。

西側を半截する途中で、埋土上層から弥生土器が出土した。いずれも破片であり、貯蔵穴が使用されなくなった後に、投棄されたものと考えられる。

46は無頸壺の口縁部破片である。外面は器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明。内面には指頭によるナデ調整痕が残る。47は「く」字形口縁の壺である。小片のため口径はやや疑問である。48は直口縁の鉢で、内外面ともに器面の荒れが進み、調整痕を観察できない。49~54は底部破片である。49・51・53・54は安定感のある平底であるが、52は外底面がややふくらみ、50は凸レンズ状となっている。調整と副部下半のひらき具合から、49・51は壺、他は甕の底部と考える。以上の土器の中で、46・50・52は弥生時代後期初頭、他は中期末に比定される。

S U - 14(図. 71)

調査区の中央、1号墳の地山整形面上、丘陵頂部から西側斜面への地形変換点付近に営まれている。北側には近接してSU-15が、南側にはSU-16がある。遺構上半部は壁の倒壊が著しく、隣接のSU-15とともに大きく落ち込んでいる。下半部の壁は、北側がほぼ垂直に立ち上がり、南側が膨らみをもち大きくオーバーハングする。壁の立ち上がり方からいと、入口部を北側に寄せて設けていたと考えられよう。さらに、SU-15との間に残る小さな平坦面を段階状のテラスと考えれば、横口式の貯蔵穴であった可能性も残る。床面は南北に長い不整橢円形である。長軸長2.35m、短軸長1.17~1.41m、床面積2.87m²を測る。遺物は出土しなかった。

S U - 15(図. 71)

SU-14の北側、1号墳の地山整形面上、丘陵頂部から西側斜面への地形変換点付近に営まれている。壁の上半部は倒壊している。下半部は膨らみをもってすぼまるが、南壁は外方へひらき気味で、出入口部分を南側に片寄らせて設けていた可能性が強い。

床面の平面形は円みの強い隅丸方形である。長軸長1.95m、短軸長1.68m、床面積2.77m²を測る。床面上で、直径20~30cm、深さ30~40cmの小穴を2個検出した。床面の長軸方向とほぼ平行して配されている。出土遺物はない。

S U - 16(図. 72~80)

SU-14の南側、1号墳の地山整形面上、丘陵頂部から南西側斜面への地形変換点付近に営ま

れている。横口式の貯蔵穴である。北側の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、他の壁はほとんど膨らまずにすぼまる。入口部は北側に設けられたと考えられる。他の貯蔵穴と比べ遺存状態は良かったが、入り口部付近は倒壊が著しく、原状をとどめていない。

上層部の埋土は、倒壊した風化の進んだ花崗岩の塊と黄褐色砂質土である。下層には赤褐色粘質土や、黄褐色・黄灰色の砂質土が互層となって縞状に堆積している。また、下層の埋土には炭化物の小片が少量混じる。床面は南側が膨らんだ隅丸方形を呈する。長さ2.3m、幅1.65m、床面積3.24m²を測る。

壁が大きくオーヴァーハングし、かなり危険な状態であったので、造構上半で掘り下げをいったん中断して、実測

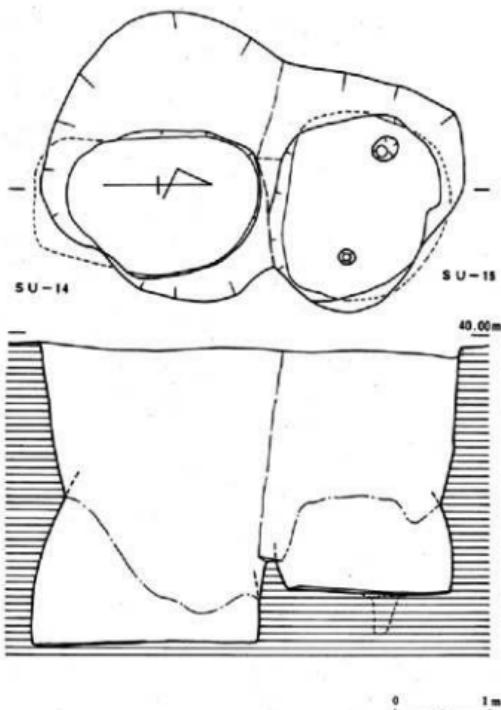


図.71 SU-14・15実測図（縮尺1/60）

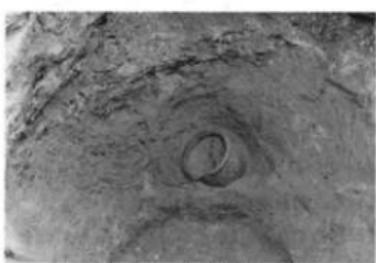


図.72 SU-16遺物出土状況1

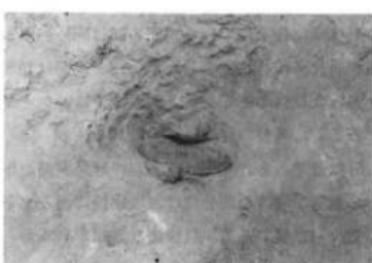


図.73 SU-16遺物出土状況2



図.74 SU-16遺物出土状況 3

を行い、その後に東側をバック・ホーで半裁して完掘した。その途中、南東側の床面から50~60cm浮いて、多数の土器が壁に沿って出土した(図.72・73)。半裁後、南東部を調査する途中にも、同様なレベルで土器群を検出した(図.74)。

これらの土器は、いずれも完形にちかく、基本的に南側にむかう横板・転倒した状態で出土している。投げ込まれたという状態ではない。貯蔵穴の床面に、周囲の壁や天井部から土砂が落ちても、それを整地して使っていたものの、北側の入り口部付近がいっきに倒壊して、押し潰されたのであろう。同様なことは、SU-40でも考えられる。出土遺物には、壺・鉢・蓋・甕がある。

55~59は小形の広口壺で、口縁部の破片は5個体分ある。いずれも口縁内面に粘土を貼付し、動形口縁に仕上げている。55・56は同一個体と考えられる。胴部破片が多数あるが、破片破断面が崩れ、接合復元できなかった。底部は75・76がつくものと考えられる。

60は直口縁の鉢である。胴部下半にハケメ調整の痕跡を部分的に認めるほかは、器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明である。

61は壺である。外面は横方向の研磨調整が施され、焼成前に赤色顔料を塗布している。さらに、顔料が剥げた部分には、焼成後に再度塗布している。内面は器面の荒れが著しい。

62~74は甕である。口縁部と底部の形状から3者に区分できる。62~70は「く」字形口縁をもち、胴部下半~底部がかなり細身で、スマートなプロポーションをもつ。小形品(62~65・

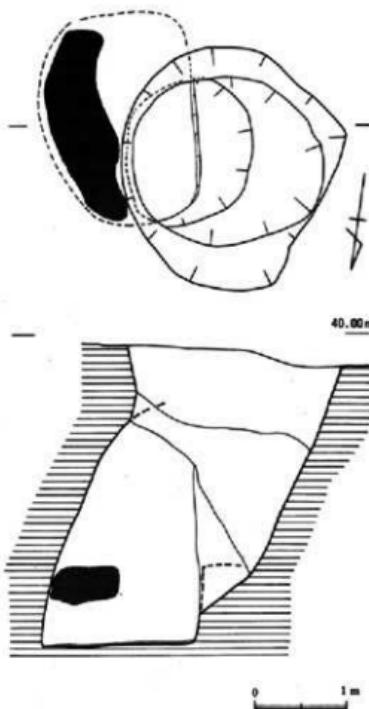


図.75 SU-16実測図(縮尺1/60)

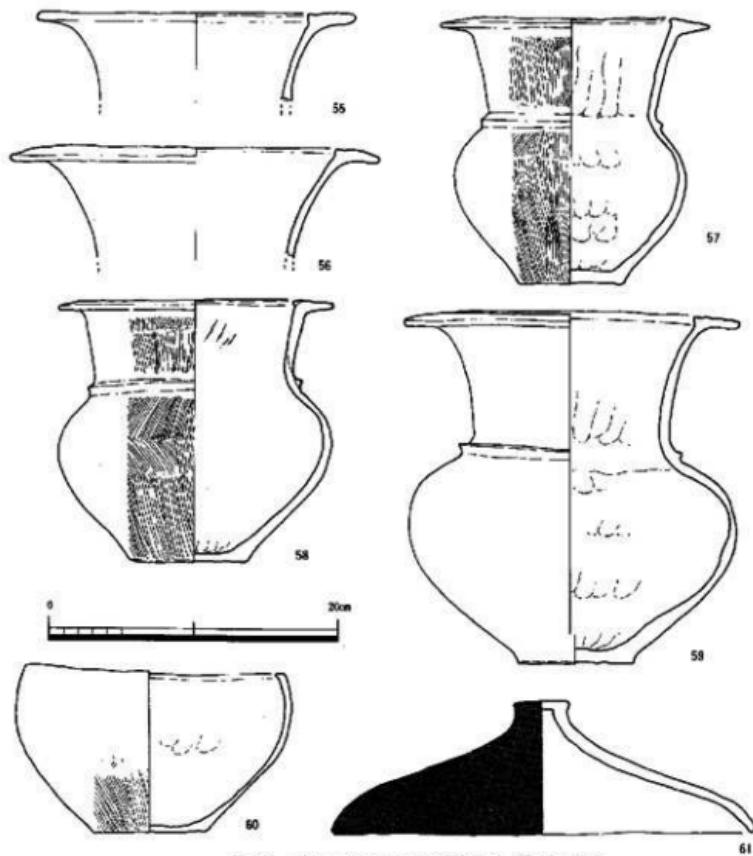


図.76 SU-16出土土器実測図1 (縮尺1/4)

69) と中形品 (66~68・70) がある。71・72は小形の甕で、「く」字形口縁をもつが、胴部下半が膨らみ、全体に円みを帯びたプロポーションをもつ。73・74は跳ね上げ口縁をもつ小形の甕である。胴部下半~底部の形状は、62~70と同様に細身である。遠賀川流域~豊前地域に分布の中心をもつ甕である。

75~80は、75・76が甕であるほかは、甕の底部破片である。

以上の土器の多くは弥生時代中期末の須恵II式土器新段階の範疇に属する。しかし、57・58・72は、形状的にやや新しい要素をもち、後期初頭に比定できよう。

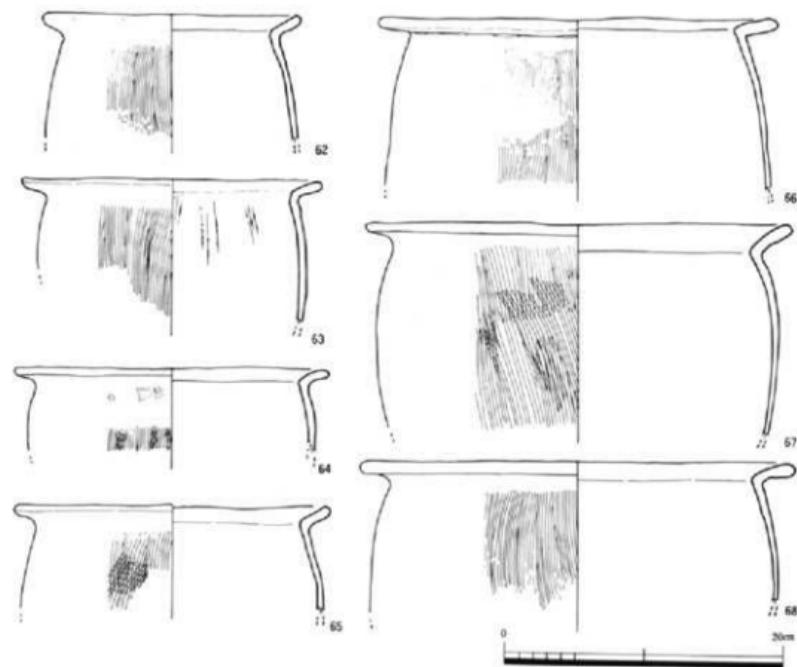


図.77 SU-16出土土器実測図2 (縮尺1/4)



図.78 SU-16出土土器

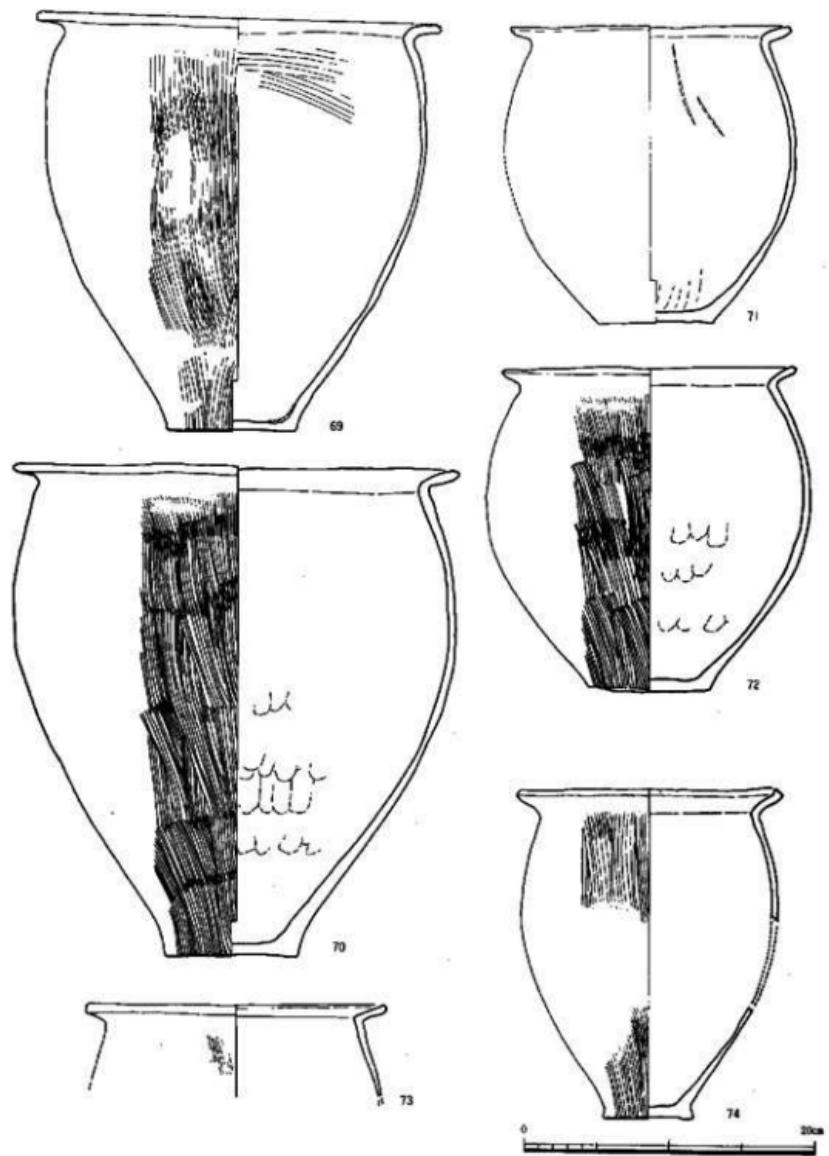


图.78 SU-16出土土器实测图3 (缩尺1/4)

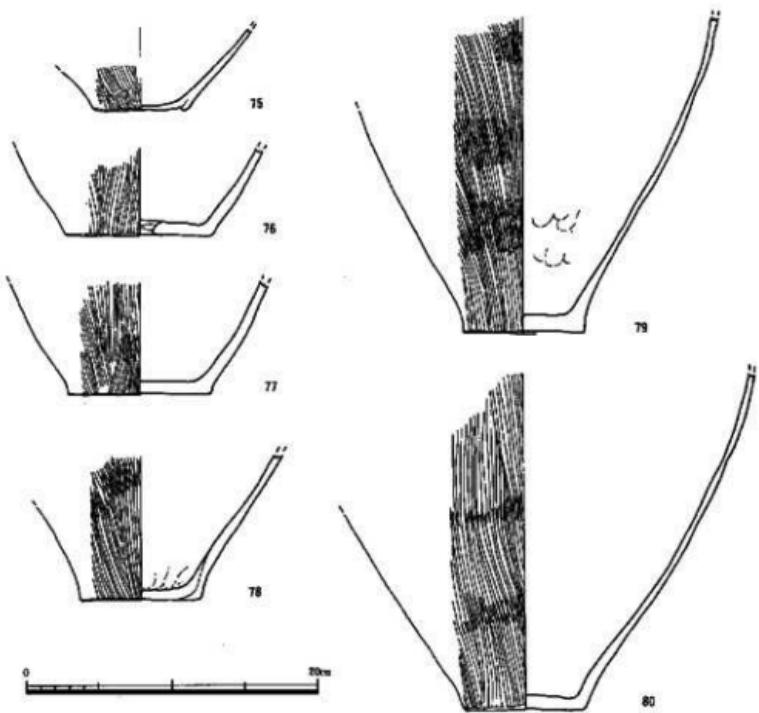


図.80 SU-16出土土器実測図4 (縮尺1/4)

SU-17 (図. 81~84)

調査区の南東側、SU-02の北側に位置し、丘陵の南西側の急斜面上に営まれている。下層でSU-59を検出した。SU-17がSU-59を切り、新しい。ただし、当初は、1基の貯蔵穴と考えて掘り進めたため、SU-17の壁の一部とSU-59の上半部を削りすぎてしまった。また、2基ともにかなり深い貯蔵穴で、深さが3mをこえた時点で、上部からの掘り下げを断念し、事故防止のためバック・ホールで北西側を半截しながら調査を進めた(図. 82・83)。

SU-17は、横口式の貯蔵穴である。丘陵の南東側斜面に堅坑を掘って入口部とし、北西側へ横穴を掘り、風化のあまり進んでいない岩層に当たった所で、ドーム状の本体部を造る。さらに、2段目部分が掘り込まれる。2段目は入口部を北西側の壁際に設け、西側へ掘り抜けドーム状の空間を造っている。1・2段目ともに床面は不整な楕円形を呈する。1段目は長軸長2.05m、短軸長1.74m、床面積2.93m²、2段目は長軸長1.55m、短軸長1.25m、床面積1.61m²を測

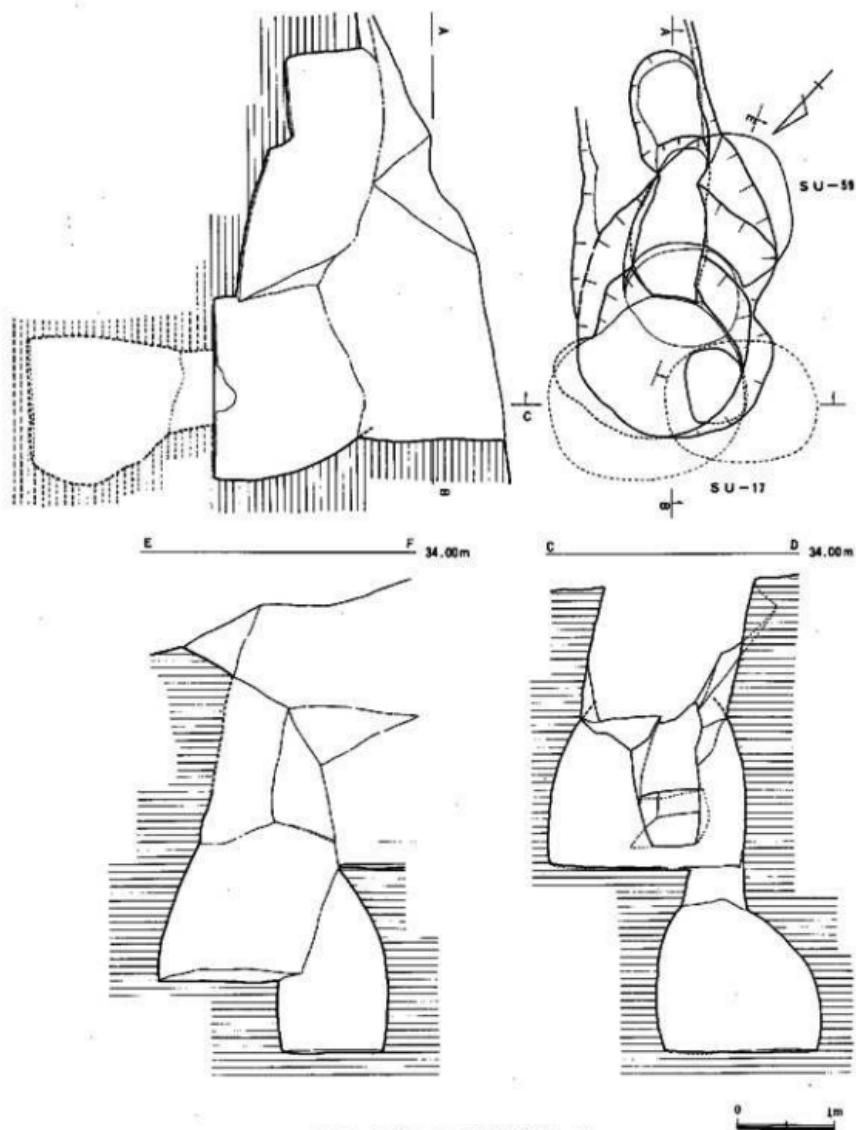


図.81 SU-17・59実測図 (1/60)



図.82 SU-17横口部(本体側から)



図.83 SU-59の2段目床面

る。

埋土は、1段目の中～上層部は崩落した天井部の花崗岩が主で、その中に粘質の強い赤褐色粘質土や黄褐色砂質土のブロックが挟まる。下層部には炭化物の小片を含む赤褐色・黄褐色・黄灰色の砂質土が縦状に堆積している。また、床面から20～30cm上面には、厚さ2～4cmの帯状の炭化物層がみられた。これに対して、2段目の埋土は、上下層とも赤褐色・黄褐色・黄灰色の砂質土が互層状に堆積している。また、白色・赤褐色の粘質土の小さなブロックが挟まれている。

甕の底部破片と大形壺の胴部破片が2点だけ出土した。81として要のみを図示した。内面に炭化物が厚く付着する。弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定できる。

SU-18(図.85・86)

調査区のはば中央付近にあり、SU-06・09・55の東側に位置している。南側にはSU-19が近接して営まれている。造構上半部は、1号墳が削平された時に失われている。また、北側と東側の壁は倒壊が著しい。北側と西側の壁は、ほとんど膨らまず、ほぼ直線的にすばまる。

床面の平面形は、不整な円形で、直径1.75～1.95m、床面積は2.88m²を測る。床面の北西側の壁沿いに、深さ10cm前後の隅丸方形の小穴が掘り込まれている。遺物は出土していない。

SU-19(図.85・86)

調査区のはば中央部付近、SU-06・09・55の東側に位置し、北側にSU-18が近接して営まれている。造構上半部は、1号墳が削平された時に失われている。そのために、東側の浅い掘り込みが、本来SU-19に伴うかは判断できない。北側の壁は床面まで倒壊している。また、東側

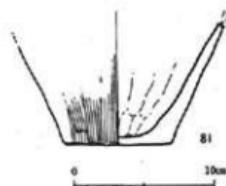


図.84 SU-17出土土器実測図
(縮尺1/4)

の壁も崩落が著しい。遺存状態の比較的良好。西側と南側の壁は、ほとんど膨らみをもたず、ほぼ直線的にすさまる。西側とくらべて南側の壁のすさまりは、ややゆるやかである。床面は不整な長楕円形を呈する。長軸長2.6m、短軸長1.95m、床面積4.17m²を測る。出土遺物はない。

S U - 20 (図. 87~89)

調査区の北半部、2号墳が営まれた丘陵鞍部に向かう緩斜面上に位置する。東側にはS U - 38が近接して営まれている。これより北側には、貯蔵穴はS U - 68・69の2基以外にならない。貯蔵穴が集中して分布する北端にあたる。調査期限が迫ったため、西側をバック・ホーで半裁して調査を進めた。壁は倒壊が著しく、床面近くがわずかに原状

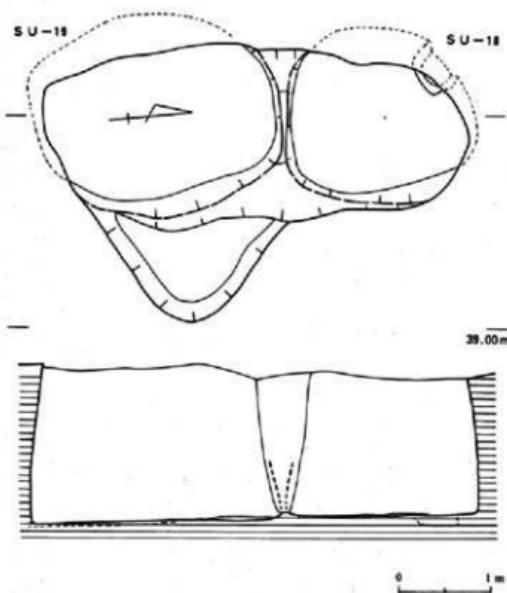


図.85 S U - 18・19実測図 (縮尺1/60)

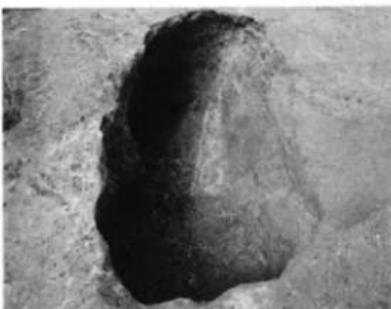


図.86 S U - 18・19
(南から)

をとどめているにすぎない。北東隅の壁には、間口73cm、高さ77cm、奥行1mほどの横穴が掘られている。床面は隅丸長方形を呈し、長さ2.05m、幅1.59m、床面積3.00m²を測る。

埋土は、崩落した壁の花崗岩の塊・赤褐色粘質シルト・黄褐色砂質土が互層状に堆積し、短時間のうちに埋められたものと考えた。また、埋土の最上層には黒色有機質土がレンズ状に堆

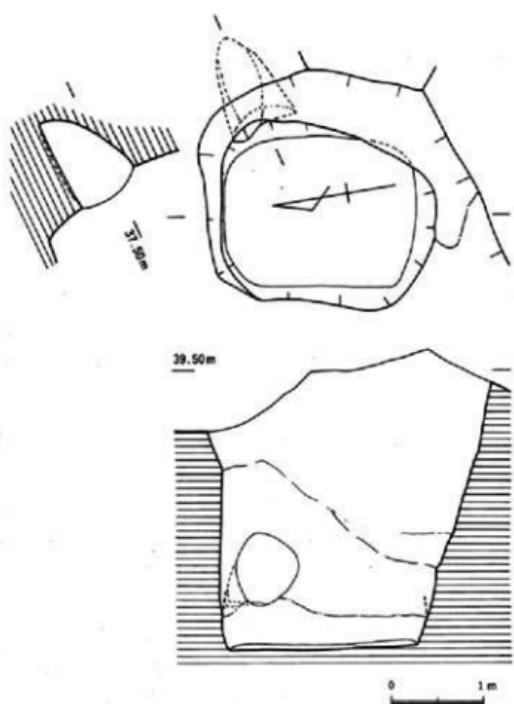


図.87 SU-20実測図 (縮尺1/60)



図.88 SU-20上部遺物出土状況

積している。貯蔵穴が放棄された後、かなりの間浅い凹地となっていたのであろう。その中から、ほぼ完形の袋状口縁の長頸壺と瓢箪土器が横転した状態で出土した(図.88)。出土遺物は、埋土最上層から出土した82と83だけである。ともに出土した時には、ほぼ完形であったが、取り上げ中に細片化し、破片の破断面も磨滅したため図上では復元できなかった。82は袋状口縁をもつ長頸壺である。外面には丹塗り磨研調整された痕跡が認められる。頸内面にはしばり痕が、内底面にはヘラ状工具痕が残る。83は器体のひずみが著しく、底部と胴部破片の径が一致しない。そのため、破片を分離して図示した。

以上は、弥生時代中期末の須歎II式土器新段階に比定される。ただし、出土状況から、本来SU-20に伴うものではない。

SU-22(図.90・91)

調査区の北半部、1号墳の地山整形面上で検出した。西側にはSU-15、北側にはSK-21・60が営まれている。東半部はすでに削り取られ失われていた。遺構上部の西側を除

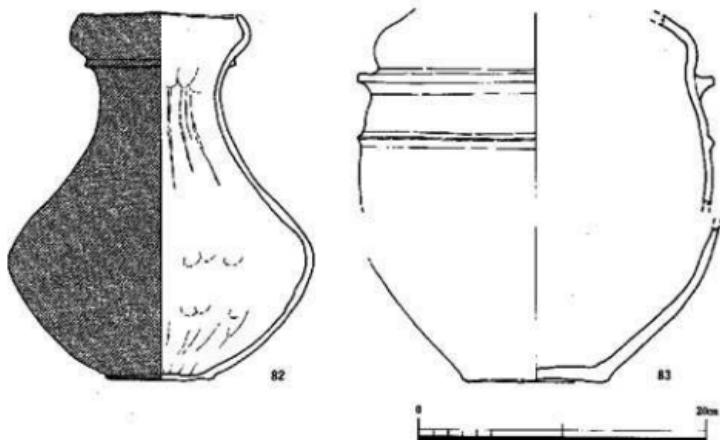


図.89 SU-20出土土器実測図（縮尺1/4）

き、壁の遺存状態は比較的よい。壁はほとんど膨らまず、ほぼ直線的にすぼまる。床面は不整な円形で、直径1.82~2.05mで、床面積は2.79m²を測る。出土遺物はない。

SU-23(図.90・92)

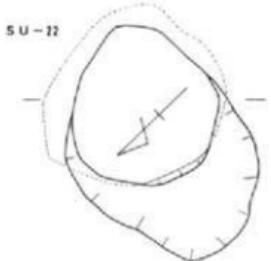
調査区の中央部、SU-09の北側、SU-18の西側、SU-10の南側に位置している。造構上半は削平されているが、下半部分の壁の遺存状態は良好である。壁はほとんど膨らまず、直線的にすぼまる。床面は不整な円みの強い隅丸長方形で、長さ2.5m、幅1.93mで、床面積は3.99m²を測る。遺物は出土していない。

SU-24・25・26(図.93)

調査区の北半部、SU-11の北側、SU-12の北西側、SU-13の西側に當まれている。調査期限の関係から、造構検出面から1~2mまでしか掘り下げていない。SU-24とSU-25は切り合うが、先後関係は不明である。いずれも造構上半は削平が著しいが、壁の遺存状態は良好で、大きく膨らみながらすぼまる。床面の平面形は、壁のすぼまり方から、SU-24・26は円形、SU-25は梢円形と推定される。また、床面積はSU-24が2.2~2.4m²、SU-26が2.6~3.0m²、SU-25が2.8~3.0m²ほどと推定される。出土遺物はない。

SU-27(図.94)

調査区の中央部、SU-56と切り合い、西側にSU-57、東側にSU-10が近接して當まれている。造構上半は削平され、南側を除き壁は床面近くまで失われている。床面の平面形は不整円形で、長軸長1.75m、短軸長1.49mで、床面積は約2m²を測る。出土遺物はない。



0 1 m

図.90 SU-22・23実測図(縮尺1/60)

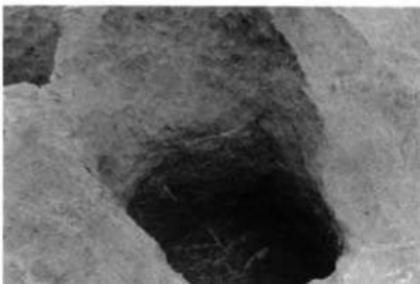


図.91 SU-22(南から)

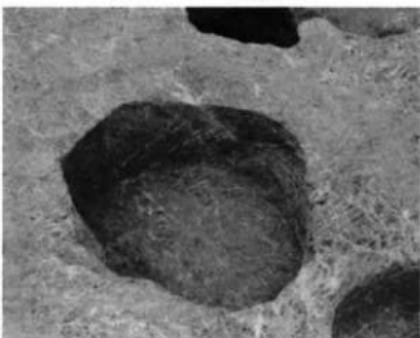


図.92 SU-23(西から)



図.93 SU-24~26

SU-28 (図. 95・96)

調査区の中央部の東寄りに位置し、SU-45を切って造られている。周辺は調査前に削平を受けて、原地形は失われているが、本来は丘陵頂部から東側斜面にうつる地形変換点付近に營まれたと考えられる。近接して西側にSU-56・57がある。

遺構上半部は、南西側のSU-56との間の壁と、北西側のSU-45を切っている部分の壁が倒壊している。壁は中程でかなり強いカーブですらまるが、下半部はそれほど膨らまず立ち上がる。床面は不整な長楕円形を呈し、長軸長1.85m、短軸長1.55m、床面積2.37m²を測る。出土遺物はない。

SU-29 (図. 97・98)

調査区の中央部の北寄りに位置する。SU-45・46と切り合うが、先後関係は不明である。近

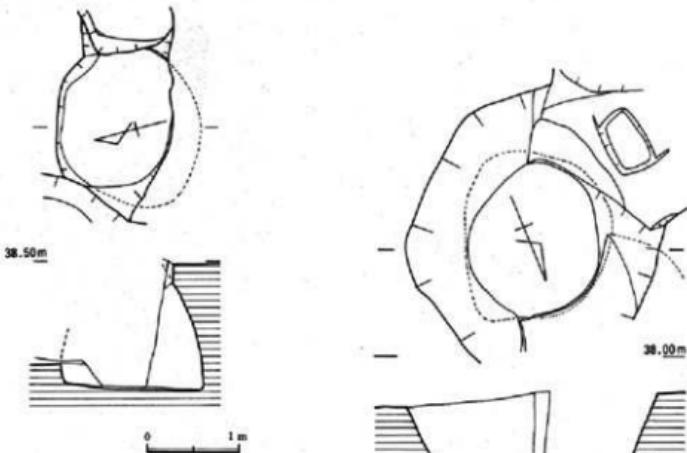


図.94 SU-27実測図 (縮尺1/60)

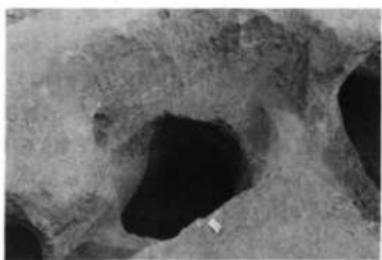


図.96 SU-28 (西から)

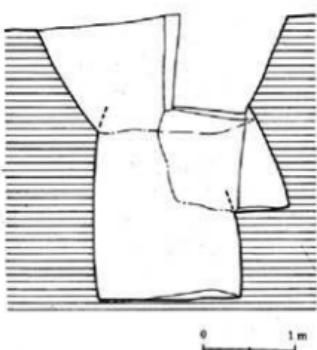


図.95 SU-28実測図 (縮尺1/60)

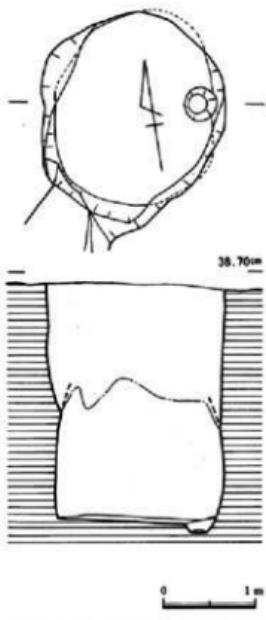


図.87 SU-29実測図 (縮尺1/60)



図.88 SU-29 (西から)

接して東側にSU-47がある。造構上半部は倒壊し、下半部の壁はそれほど膨らまず立ち上がる。床面では東側の壁に接して直径35cm、深さ20cmほどの小穴を検出した。床面の平面形は不整梢円形で、長軸長2.14m、短軸長1.69m、床面積2.94m²を測る。造物は出土していない。

SU-31(図.99-101)

調査区の中央部の東側斜面に位置している。SK-34と切り合うが、先後関係は不明。南西側にはSU-35が近接して営まれる。調査はバック・ホーで東側を半截し、床面近くまで掘り下げて調査を進めた。造構の上部は崩れているが、壁の遺存状態は良好で、壁はほぼ直線的にすばまる。床面の南東隅には、隅丸方形の小さな掘り込み部分が設けられる。長さ1m、幅70cm、深さ20cm、床面積0.59m²。床面の平面形は、隅丸の台形状を呈し、長辺2.25m、短辺1.15m、幅1.5mを測る。出土遺物はない。

SU-32(図.102-104)

調査区の中央部の東側斜面に位置する。北側にはSU-47が営まれ、その横口部を切っている。また、南側にSU-33が近接して営まれている。バック・ホーで東側を半截し床面近くまで掘り下げて調査を行なった。

造構上部は壁の倒壊が著しい。下半部の壁はわずかに膨らみながらすばまる。埋土は、黄褐色や黄灰色の砂質土と、赤褐色の粘質シルトが、互層となつて堆積している。床面近くには、非常にしまった厚さ数cmの赤褐色の粘質シルト層が床面全面に見られた。床面は不整な方形を呈し、長辺1.45m、短辺1.15mを測る。床面の西側隅を40cmほど掘り下げ、さらに西側に向かって横穴を掘り抜げている。横穴部

分の平面形は、隅丸の台形で、長辺95cm、短辺80cm、奥行55cm、床面積0.51m²を測る。出土遺物はない。

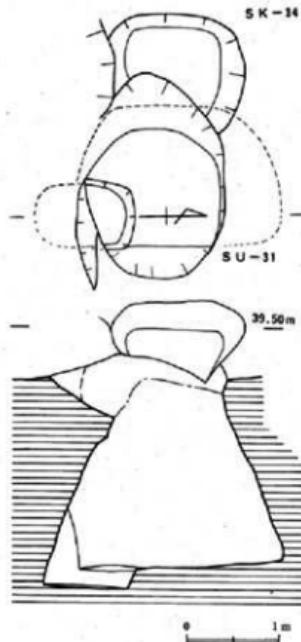


図.100 SU-31実測図(縮尺1/60)
SU-33(図.102・103)

調査区の中央部の東側斜面に位置し、北側にはSU-32が近接して営まれる。調査期限の関係から、SU-32とともにバック・ホーで東側を半截し床面近くまで掘り下げて調査を行なうこととした。遺構上部は壁の倒壊が著しい。埋土は、その倒壊した花崗岩の塊と、黄褐色や黄灰色の砂質土が、縞状に互層となって堆積している。床面近くの黄灰色砂質土には、炭化物の小片がわずかに含まれていた。下半部の壁はほとんど膨らまずにすばまる。床面の平面形は長方形で、長辺2.08m、短辺

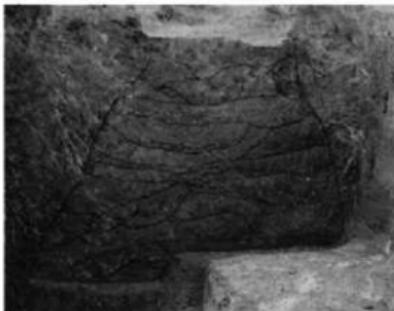
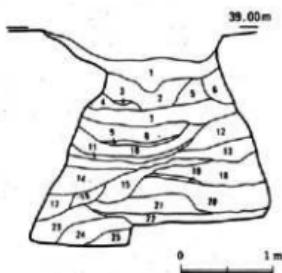


図.100 SU-31土層断面



- 1・2・4～6：赤褐色粘質土に黄灰色砂質土の大きなブロックを含む。結りけが強くしまっている。
- 3：黄褐色砂質土。
- 7・14：赤褐色粘質土に黄灰色砂質土を含む。
- 8・10・12・13・15・18・20・21・23：黄褐色砂質土に赤褐色粘質土を少量含む。
- 9・11・19：赤褐色粘質土に黄褐色砂質土が混じる。しまっていない。
- 16・24：赤褐色粘質土に部分的に黄灰色砂質土をブロック状に含む。しまっている。
- 17：黄灰色砂質土。
- 22：赤褐色粘質土に黄灰色砂質土を含む。炭化物の小片を含む。しまはない。
- 25・26とは同質であるが、炭化物を含まない。

図.101 SU-31土層断面図(縮尺1/60)

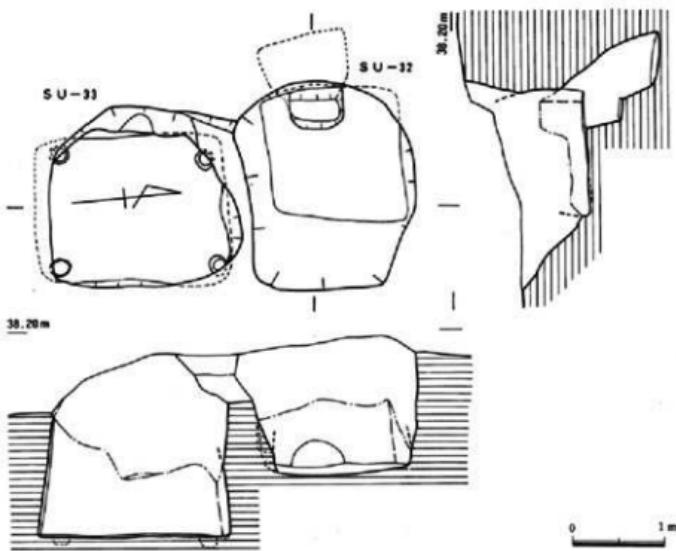


図.102 SU-32・33実測図 (縮尺1/60)



図.103 SU-33 (北から)



図.104 SU-32 (北から)

1.4~1.6m、床面積3.15m²を測る。床面の四隅には直径20cm前後の小穴が掘られている。出土遺物はない。

SU-35 (図. 105)

調査区の中央部の東側斜面に位置する。北東側に近接してSU-31、SK-34が営まれている。楕円形を呈する1段目の床面の北側から、北西側に向かって2段目の横穴部分を掘り抜げてい

る。1段目は、上半部の壁の倒壊が著しいが、下半部は遺存状態がよく、かなり膨らみをもつてすばまる。1段目の床面は、長軸長約1.3m、短軸長1.1m、床面積0.79m²を測る。2段目の床面は隅丸の不整な台形を呈する。長辺1.55m、短辺0.8~1.55m、床面積1.61m²を測る。

埋土は倒壊した壁である花崗岩の塊に混じり、赤褐色粘質土や黄褐色砂質シルトがブロックで混じる。遺物は出土していない。

SU-36(図.105)

調査区の中央部の東側斜面に位置する。周辺はかなり急勾配の斜面である。北側にはSU-33が営まれている。調査は、バック・ホーで東側を半裁し床面近くまで掘り下げたが、失敗して床面の一部を削りすぎてしまった。また、遺構上半部はかなり削られているが、壁の遺存状態は比較的よく、ほぼ直線的にすばまる。床面の平面形は隅丸方形で、長辺1.75m、短辺1.55m、床面積2.34m²を測る。調査区の丘陵東側斜面には、SU-31~33・35などの比較的小形の貯蔵穴が営まれているが、その中でSU-36はもっとも小形の貯蔵穴である。出土遺物はない。

SU-38(図.106・107)

調査区の北半部、2号墳の位置する丘陵鞍部に向かう緩斜面上に営まれている。ほぼ接して西側にSU-20、東側にSK-37がある。調査はバック・ホーで北東側を半裁し床面近くまで掘り下げて進めた。

遺構上半部の壁面は倒壊が著しいが、壁の遺存状況から、入口部が北西側に寄せて設けられた貯蔵穴と考えられる。

埋土は、床面近くの下層部では、黄褐色や黄灰色の砂質土と、赤褐色の粘質シルトが、互層となって堆積している。中・上層部の埋土は、花崗岩のバイラン土である。黄褐色や黄灰色の砂質土がブロック状に混じる。こうした堆積状況から埋没過程を大まかに3段階に区分できる。床面の平面形は不整な橢円形を呈して、長軸長1.92m、短軸長1.36m、床面積2.15m²を測る。出土遺物はない。

SU-39(図.108・109)

調査区の中央の南寄りに位置する。SK-61と切り合うが、先後関係は不明である。また、北

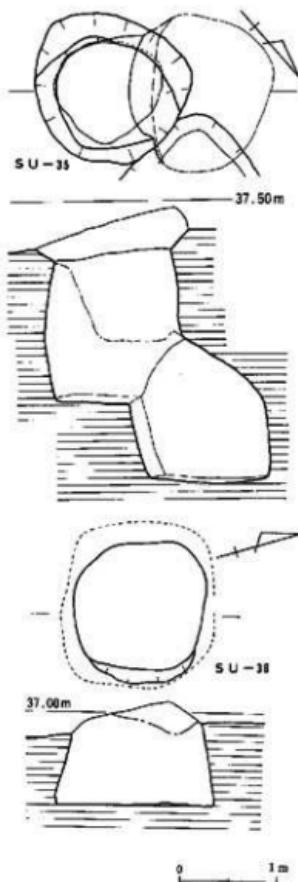


図.105 SU-35・36実測図
(縮尺1/60)

側にはSU-28・57、西側にはSU-18が営まれている。造構の遺存状態は、上半部の壁面の倒壊が著しいが、下半部は遺存状態がよく、ほぼ垂直に立ち上がる。西側の壁面に上下2段の階段状のテラスが掘り込まれている。床面の平面形は込みの強い楕円形を呈し、長軸長2.45m、短軸長1.85m、床面積3.77m²を測る。遺物は出土していない。

SU-40(図. 110~118)

調査区の中央部南西寄りに位置し、丘陵頂部から一段下がった斜面上に営まれている。南西側にはSU-05が近接して営まれている。造構の上面は、1号墳が調査前に削平された時、かなり削られている。北側と西側に長方形のテラス状の掘込みがあるが、SU-40に本来伴う施設かは明らかでない。北側のテラス状の掘込み以下の壁は、ほぼ開き気

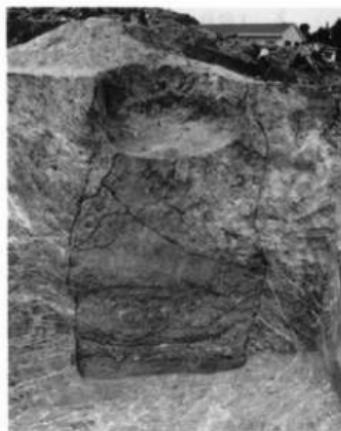


図.106 SU-38土層断面

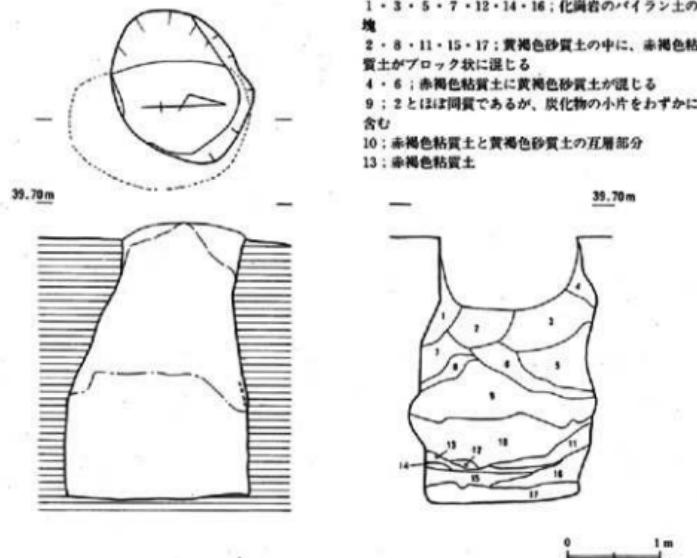


図.107 SU-38実測図(縮尺1/60)

味に立ち上がるが、他の壁は、かなり強い膨らみをもってすばまる。床面の平面形は、不整な橢円形を呈する。長軸長2.27m、短軸長2.03m、床面積3.77m²を測る。また、北側の床面には、幅25~30cmほどの溝が部分的に巡る。

床面から50cmほど浮いた状態で、大小の壺や石包丁を検出した。これらの壺は、横転した状態で押し潰されている。土器が集中して出土した面以下は、黄褐色や灰黄色の砂質土と赤褐色粘質土がほぼ水平に縞状に互層状に堆積している。遺物の出土状況と埋土の堆積状況から、壁の崩壊土を何度も均して、貯蔵穴を使っていたものの、壁がいっさに倒壊して埋没したと考えた。

84・85は小形壺で、84の肩部分には、有軸羽状文を彩文で描いた痕跡が認められる。口縁部内面にも彩文の痕跡が残る。両者ともに外面は、横方向の研磨調整で仕上げる。

86~88は中形壺である。86は頸部と肩部の境に3条、胴部上半に2条のヘラ描き沈線文を巡らせ、その間に二枚貝で無軸羽状文を施文する。87は小さな断面三角形の凸帯、88は3条のヘラ描き沈線文を巡らせる。いずれも器面の荒れが著しく、調整の仔細は不明。

89は大形壺である。口唇部の上下端と、肩部の凸帯にヘラ状工具でキザミが施される。外面はハケメ調整の後に、横あるいは斜方向の研磨調整で仕上げる。また、胴部内面には指頭痕が帶状に残る。

90は石包丁である。

以上は、弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定でき、出土状況からもSU-40の時期は該期と考えられよう。

SU-41(図.119~121)

調査区の南端、丘陵の南西端の斜面上に営まれてい

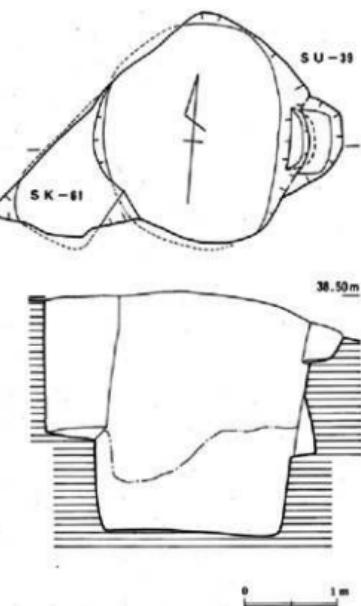


図.108 SU-39実測図(縮尺1/60)



図.109 SU-39(南から)

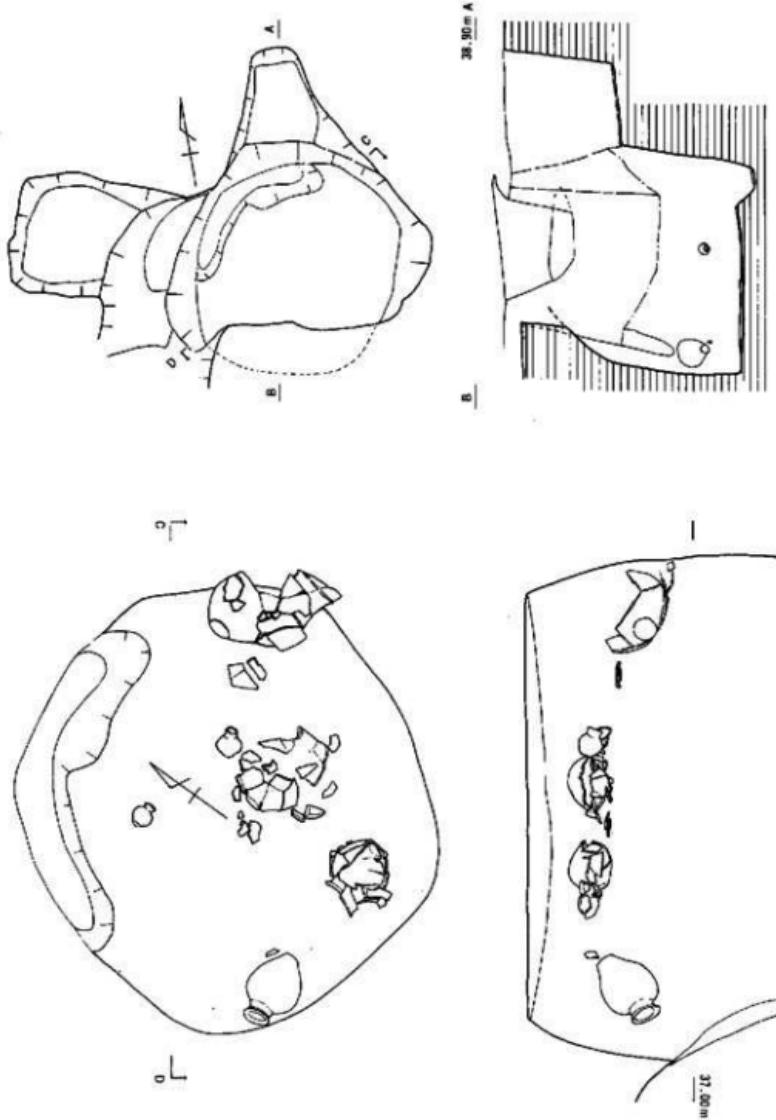


図.110 SU-40実測図 (縮尺 1/30・1/60)



図.111 SU-40(東から)



図.112 SU-40遺物出土状況



図.113 SU-40出土土器

る。SU-02の南側にのびる横口式の入口部を精査していた時に、初めて存在に気が付いた。両者の切り合い関係は不明。

貯蔵穴の北側は、SU-02によつて上半部が崩されている。

壁面の遺存状態は悪く、上半部は完全に倒壊している。下半部の壁は、南側が垂直に立ち上がるのに対し、北側はかなり急角度ですばまっている。床面の平面形は、隅丸方形を呈して、長辺1.67m、短辺1.6m、床面積2.37m²を測る。

床面の北西隅には、長軸長60cm、短軸長37cm、深さ12cmほどの楕円形の小穴が掘られ、貯蔵穴の上縁部の南側に設けられた幅40cmのテラス状の段と対置している。壁のすばまり方と考えあわせると、上縁部のテラスと床面の小穴とを対角線に結び、斜めに梯子を立て掛けたものと推測されよう。

出土遺物には、91の小形壺の肩部破片と、92の大形壺の胴部破片がある。91は横方向の研磨調整の後に3条の平行沈線文と、その下方に4条の下向重弧文をヘラ状工具で施文する。92は胴部外面をハケメ調整の後に、横あるいは斜方向の研磨調整で仕上げる。胴部内面には指頭痕が帯状に残る。

これらは弥生時代前期後葉の板付II式土器中段階に比定できる。

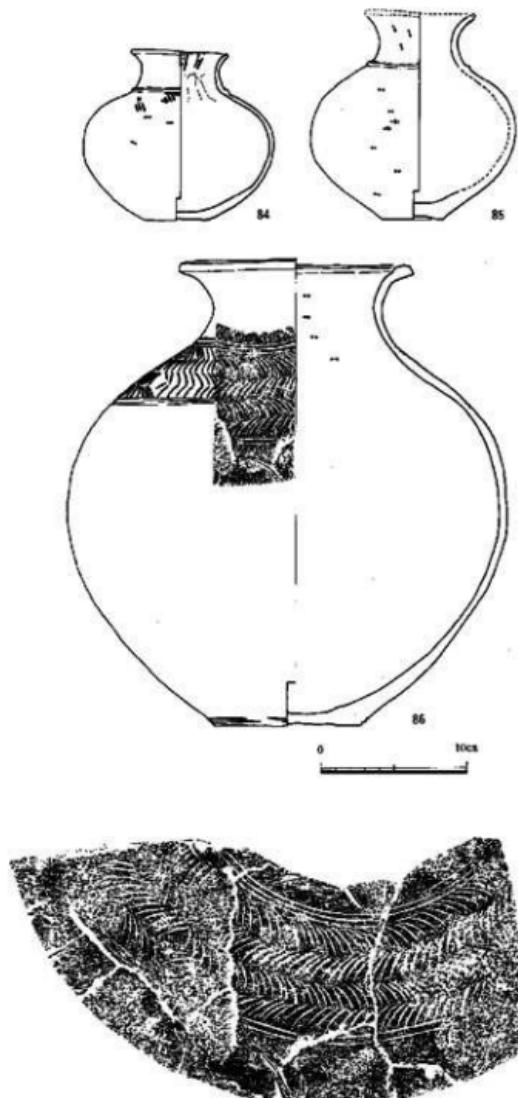
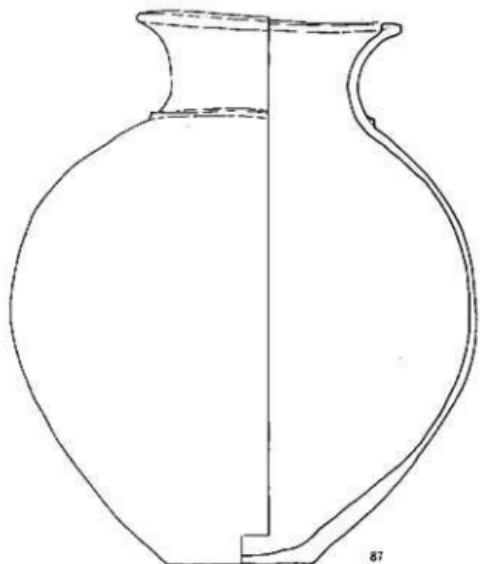
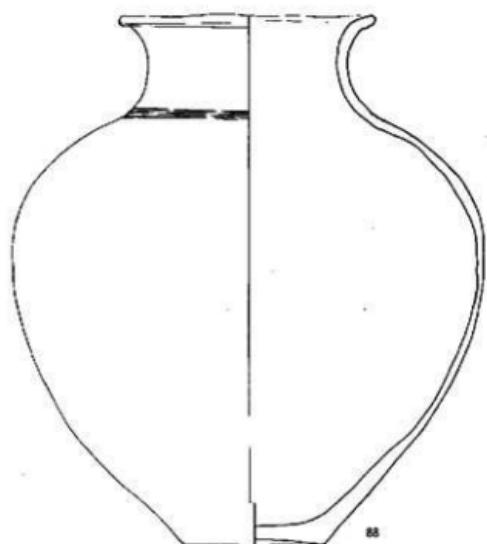


図.114 SU-45出土土器実測図1 (縮尺1/4、拓影1/3)



SU-42(図. 30・32)

調査区の南端の丘陵先端に営まれている。SU-01の床面で検出した。その先後関係は不明である。埋土には、ほぼ同質の花崗岩の大きなブロックが混じり、床面近くでは小さな炭化物片がごく少量混じった黄褐色砂質シルトが堆積していた。壁の上半部はSU-01と切り合ひ、不確定であるが、下半部はかなり膨らみながらすぼまる。床面の平面形は、不整な長楕円形を呈し、長軸長1.89m、短軸長1.55m、床面積2.3m²を測る。出土遺物はない。



SU-43(図. 122)

調査区の南端、丘陵の南東端の斜面上に営まれている。SU-44と切り合うが、その先後関係は不明である。東側をバック・ホーで半截し床面近くまで掘り下げて、調査をすすめた。当初、SU-44の1基の貯蔵穴と考えていたため、SU-43の東側の床面を、バック・ホーでとばしてしまった。

埋土の上層部は、花崗岩のバイラン土で、下層部には黄褐色・灰黄色の砂質土や赤褐色粘質土が堆積している。遺存状態の良い北側と西側の壁

図.115 SU-40出土土器実測図2 (縮尺1/4)

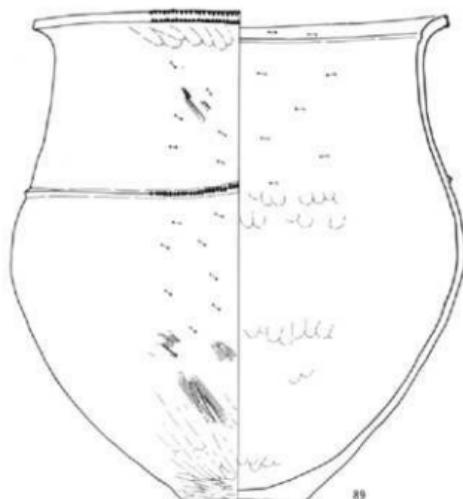


圖.116 SU-40出土土器實測圖 3
(縮尺1/6)



圖.117 SU-40出土石包丁實測
圖 (縮尺1/2)

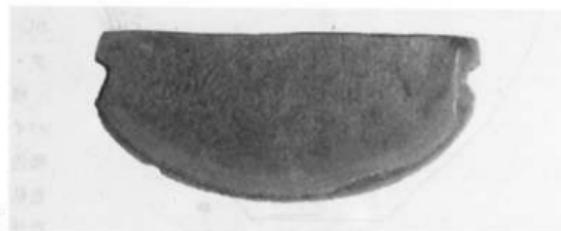


圖.118 SU-40出土石
包丁

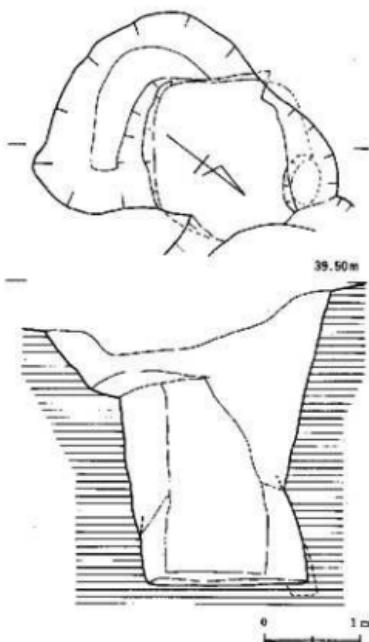


図.119 SU-41実測図 (縮尺1/60)

は、やや膨らみながらすばまる。床面の平面形は、隅丸の長方形である。残存した床面は長辺1.92m、短辺1.6mで、本来3.5m²ほどの床面積をもつものと推定される。出土遺物はない。

SU-44(図.122)

調査区の南端に位置する。SU-43と切り合うが、先後関係は不明である。調査は東側をバック・ホーで半裁し床面近くまで掘り下げる進めた。埋土は、SU-43と同じく、上層部には風化の進んだ花崗岩の塊が堆積し、下層部には黄褐色・灰黄色の砂質土と赤褐色粘質土がほぼ水平に縞状に互層状に堆積していた。東側の壁は、かなり膨らみをもっているのに対して、西側は急角度ですばまる。

床面の西隅には、直径30~35cm、深さ16~18cmほどの凸形の小穴がある。SU-41と同様に、



図.120 SU-41出土土器実測図1
(縮尺1/4)

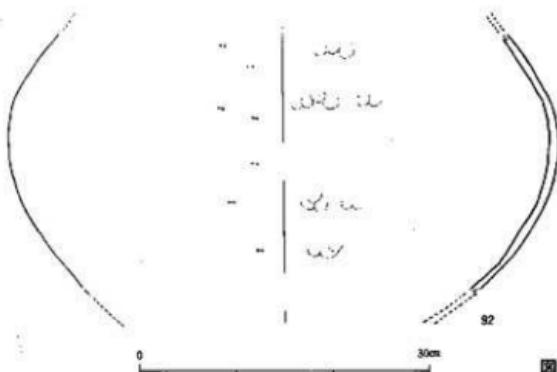


図.121 SU-41出土土器実測図2
(縮尺1/6)

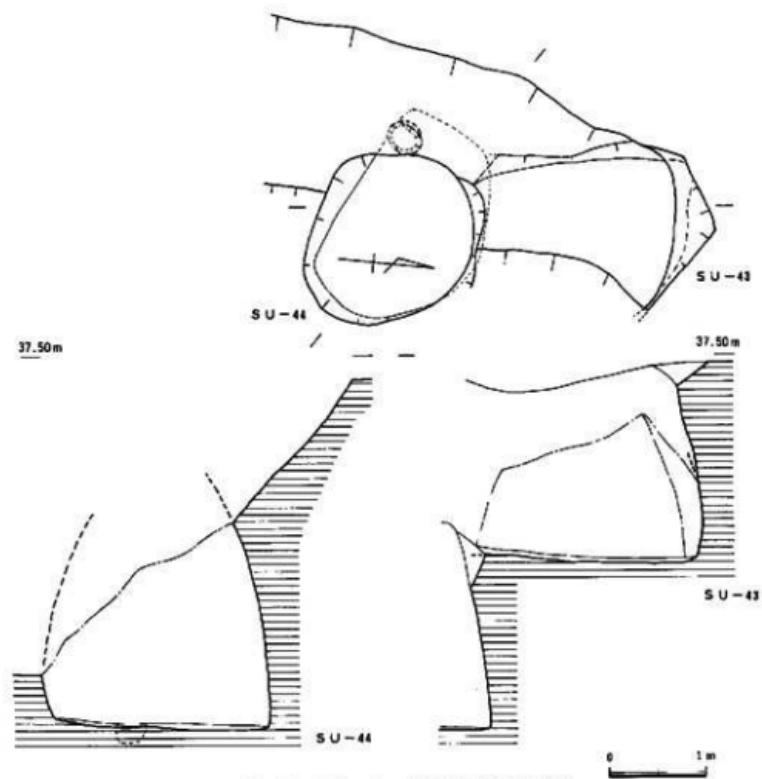


図.122 SU-43・44実測図 (縮尺 1/60)

出入りするための梯子を立て掛けるためのものと考えた。その場合、出入口は東側を向くこととなる。床面は北側が膨らんだ隅丸長方形を呈する。長辺2.16m、短辺1.46m、床面積2.65m²を測る。出上遺物はない。

SU-45(図.123)

調査区の中央部に位置し、SU-28の壁を清掃中に確認した。切り合い関係は、SU-28に切られている。周辺は調査前に削平を受けて、原地形は失われているが、本来は丘陵頂部から東側斜面にうつる地形変換点付近に營まれたと考えられる。

埋土の下層部分は、ほぼ水平に堆積した黄褐色・灰黄色の砂質土で、中層部は崩落した壁や天井部の花崗岩の塊が主である。壁は、東側がほぼ垂直に立ち上がるが、西側はかなり急角度

ですばまる。床面は梢円形で、長軸長2.3～2.4m、短軸長1.97mを測る。残存床面積3.31m²で、本来は3.9～4.0m²と推定される。出土遺物はない。

SU-46(図、123)

調査区の中央の東寄りに位置する。SU-29の北側の壁面を清掃中に検出した。SU-29・47・48と切り合うが、その先後関係は不明である。造存状態がかなり悪く、壁もほとんど倒壊し、全体の構造は明らかでない。現状では、かなり浅い貯蔵穴であるが、周辺は調査前の削平が著しい。本来の掘込み面は、1mほど上方にあったと考えられる。SU-32・33・36のように小形の貯蔵穴である。床面の平面形は、SU-47と切り合っているため不確実であるが、梢円形と考えられる。長軸長1.6mを測り、推定短軸長1.4mである。床面積は現存で1.26m²であり、推定床面積は1.9m²ほどであろう。遺物は出土していない。

SU-47(図、123)

調査区の中央の東寄りに位置する。SU-32・46と切り合う。ただし、その先後関係は不明である。

SU-46と同じく、かなり浅い貯蔵穴である。造構の上半部は、床面近くまで削平されている。埋土は、床面近くまで、ほぼ同質の花崗岩のバイラン土が堆積していた。東側の斜面向かい細長い出入口部分が掘られている。貯蔵穴本体の床面の平面形は、不整な梢円形で、長軸長1.8m、短軸長1.45m、出入口部を除く本体部分の床面積2.18m²を測る。出土遺物はない。

SU-48(図、123)

調査区の中央の東寄りに位置する。SU-46の床面を清掃中に検出した。先後関係は不明である。

上半部の壁は倒壊が著しい。下半部は南側がほぼ垂直に立ち上がるのに対して、北側は急角度でほまっている。また、造構の上縁部は、やや南に片寄っている。南側に向かって出入口が設けられていたのだろうか。床面は不整で円みの強い隅丸方形を呈する。長辺1.87m、短辺1.85m、床面積2.93m²を測る。出土遺物はない。

SU-49(図、124・125)

調査区の南半部、丘陵の南側斜面上に営まれている。造構検出面では、SP-63を検出していたが、埋土が地山と同質の花崗岩のバイラン土であったため、検出できていなかった。調査の最終日に、1～1.5mほどバック・ホーで地山が削られた時点で、その存在に気が付いた。そのため、壁は深さ5～10cmほどしか確認できず、造構全体の構造は明らかでない。床面の平面形は、やや長めの円形を呈し、長軸長1.8m、短軸長1.4m、床面積2.01m²を測る。

造構の上半部分を欠くが、残った床面近くの埋土中から、93・94の中・小形壺の底部破片が2個出土した。ともに外面は丁寧なナテ調整で仕上げられている。弥生時代前期後葉～末の板付II式土器中～新段階のものであろう。

SU-50(図. 124)

調査区の南半部、丘陵の南側斜面上に営まれている。SU-49の北東側に位置している。SU-49と同じく、調査の最終日に、1~1.5mほどバック・ホーで地山が削られた時点での存

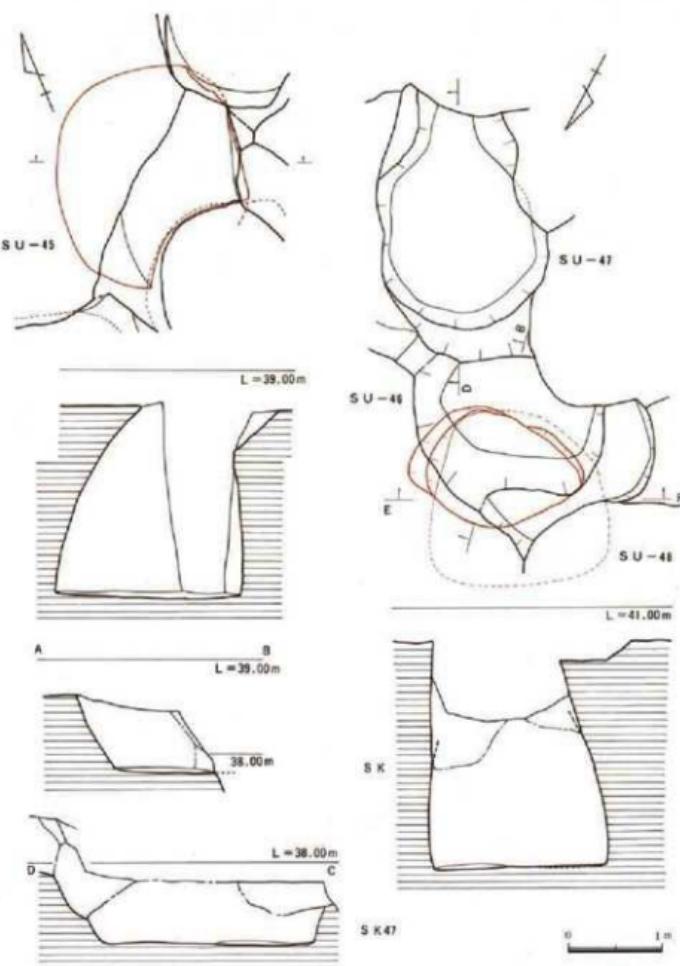


図.123 SU-45~48実測図 (縮尺 1/60)

在に気が付いた。そのため、壁は深さ5~10cmほどしか確認できず、造構全体の構造は明らかでない。地山上の造構検出面で、SK-62を検出していたが、両者の関係は明らかではない。床面は不整な円形を呈し、直径1.75~1.85m、床面積2.7m²を測る。造物は出土していない。

SU-51(図.124)

調査区の南半部、SU-49の南東側に位置する。SU-49・50と同じく、調査の最終日に、地山を1~1.5mほど削り下がった時点で、その存在に気が付いた。

SU-49・50と比べ深く掘り込んでいたため、貯藏穴の構造を部分的ではあるが確認できた。南側の壁は、やや外開きに立ち上がっている。これに対して、北側の壁は、かなりきつい角度ですばまっていくようである。床面の南側隅が若干掘り回められ、その中に、さらに直径15~

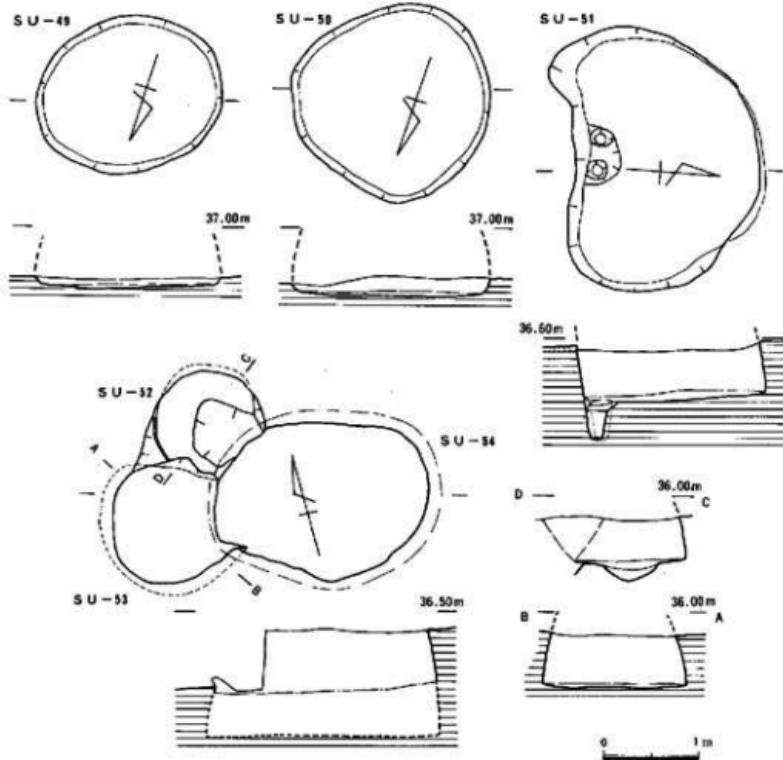


図.124 SU-49~54実測図 (縮尺1/60)

20cm、深さ40~15cmほどの小穴が2つ掘られている。壁の立ち上がり方を考えあわせると、梯子等を固定させるための施設であろうか。床面はおむすび状の平面形をもち、長軸長2.53m、短軸長1.85m、床面積3.92m²を測る。

出土遺物はない。

SU-52(図.124)

SU-52~54も、調査の最終日に、地山を1~1.5mほど削り下げた時点で、その存在に気が付いた。互いに切り合うが、埋上が等質の花崗岩のバイラン土であったため、先後関係を確定することはできなかった。調査区の南半部、SU-49の南西側、SU-01・42とSU-07の間に位置する。

今回の調査で検出した貯蔵穴の中でも、もっとも小形である。規模から貯蔵穴とするには疑問も残る。SU-54の出入口部分とも考えたが、壁はラスコ状にすばまり、構造的には他の貯蔵穴とかわりがないので、ここでは一応貯蔵穴と考えておきたい。床面は東側を若干掘りすぎたが、平面形は円形で、直径1.7mを測り、残存床面積は0.87m²で、本來の床面積は0.98m²ほどと推定される。出土遺物はない。

SU-53(図.124)

SU-52・54と切り合うが、先後関係は不明である。壁は緩やかな膨らみをもってすばまる。床面の平面形は円形で、直径1.3~1.5m、残存床面積は1.43m²を測り、本來の面積は1.6~1.7m²ほどであろうか。比較的小形の貯蔵穴である。出土遺物はない。

SU-54(図.124)

前述したように、調査期間の最終日に遺構を確認したため、完掘することを断念し、50cmほど掘り下げた後に、ボーリング・ステッキで未掘部分の深さを確認するにどどまった。そのため、床面の平面形は不明。ただし、50cmほど掘り下げた面と壁のすばまり方から推定すると、長楕円形であろう。床面積も3.5~4.0m²ほどであろうか。出土遺物はない。

SU-55(図.49)

調査区の南半部、丘陵頂部の平坦面から斜面上にうつりかわる部分に営まれている。SU-03の南東側で検出した。SU-06・09と切り合っているが、先後関係は不明である。床面は円形で、直径2.0~2.1mで、床面積は3.61m²を測る。壁は上部が倒壊しているが、下半部の遺存状態は比較的良好。南側の壁はかなり急激にすばまるが、他はほぼ直線的にすばまる。遺物は出土していない。

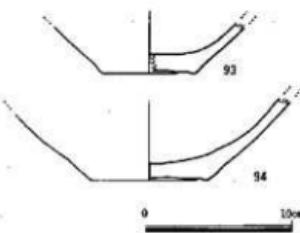


図.125 SU-49出土上器実測図
(縮尺1/4)

S U - 56 (図、126・127)

調査区の中央部に位置する。SU-10・27・57と切り合うが、先後関係は不明である。また、SU-56自体も、貯蔵穴の切り合いが激しく、1つの造構としてのまとまりが弱く、2つ以上の貯蔵穴が重複している可能性も残す。

やや膨らみながらすばまる北側の壁面以外は、他の貯蔵穴との切り合いのために、はっきりしない。また、SU-57と切り合って土壌状の造構が検出された。長さ1.1m、幅0.8~0.9mを測り、この貯蔵穴に伴う何らかの施設であろう。床面の平面形はかなり不正確である。床面の平面形は、部分的に残る壁面と床面の土壌状の施設から、隅丸の歪な平行四辺形と考えた。その場合、床面の規模は、長さ2.5m、幅1.7mほどと推定される。推定床面積は4.3m²ほどであろう。出土遺物はない。

S U - 57 (図、126・127)

調査区の中央部に位置する。SU-27・57と切り合うが、その先後関係は不明である。

南側の壁は、かなり急角度ですばまる。北側の壁は、SU-56と切り合っているため、遺存状態は悪いが、床面近くはそれほど急激にすばまらない。床面は不整な細長い楕円形を呈し、東側部分が台形状に深さ20cmほど掘り下げられている。床面の長軸長は2.32m、短軸長は1.05~1.36mで、床面積2.33m²を測る。東側の掘り下げ部分は、間口が86cm、奥行65cmを測る。遺物は出土していない。

S U - 59 (図、81・83)

調査区の南東側、丘陵の東側の急斜面上に営まれている。SU-17の横口部をバック・ホーで半蔵中に、SU-59に気が付いたため、東側上半部を削り取ってしまった。SU-17との切り合い関係は土崩断面で確定できなかったが、2基の位置関係からSU-59が先行して造られたと考えた。

2段掘りの貯蔵穴で、SU-17と同じく、検出面から2段目の床面まで5m前後の深さに掘られている。造構上半部の構造は明らかでないが、SU-17の横口部の状況から考えると、入口部は南東部に寄せて設けられていたものと推測される。1段目の床面は、不整な長楕円形に造られ、その北側隅からほぼ円形の2段目が掘り下げられる。1段目は長軸長2.3m、短軸長1.5m、床面積1.74m²を測り、2段目は長軸長1.15m、短軸長1.05m、床面積0.92m²である。遺物は出土していない。

S U - 67 (図、29)

調査区の北西部の緩斜面上に営まれている。周辺の地山面をバック・ホーでやや深めに削り、造構の検出に努めたが、5mほど北側にSU-68を確認した。周辺では弥生時代の造構は検出されておらず、また貯蔵穴が集中して営まれる範囲からも離れている。調査期間の関係から、造構上面を検出したにすぎない。出土遺物はない。

SU-68(図.29)

調査区の北西端の緩斜面上に営まれている。SU-67と同じく、調査期間の関係から、遺構上面を検出したにすぎない。出土遺物はない。



図.126 SU-10・27・57・58(南から)

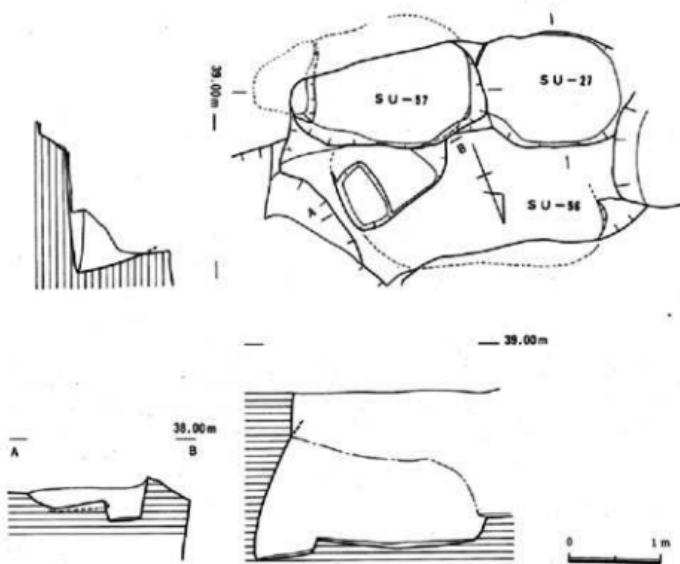


図.127 SU-56・57実測図(縮尺1/60)

(2) 土壙

土壙は7基を検出した。その中で、SK-21・30・34・37は、埋土が花崗岩のバイラン上であり、当初、貯蔵穴あるいは貯蔵穴に伴う何らかの施設と考えて調査を進めた。しかし、遺構の規模や形状、他の貯蔵穴との関係から、土壙としたものである。また、SK-60-62は黒色有機質土を埋土としており、貯蔵穴と近接することはない。これらの土壙からは、後述するように、遺物は出土していない。ただし、埋土の質や、古墳との位置関係から、ここでは弥生時代のものと考えて報告する。

SK-21 (図、128)

調査区の北半部、1号墳の地山整形面の北側で検出した。南側にはSU-22、西側にはSU-24～26が営まれている。東半部はすでに削り取られ失われていた。SK-60と切り合っている。ただし、その先後関係は不明である。平面形は不整形で、舟底状の床面をもつ。床面では長軸長2.2m、短軸長1.7m以上を測る。出土遺物はない。

SK-30 (図、128)

調査区の北東部、2号墳が営まれた丘陵鞍部の東側斜面上に位置する。周辺には他の貯蔵穴や土壙は見られない。斜面の勾配が急で、土壙の東側部分は失われていた。舟底状の浅い土壙であり、埋土は風化の進んだ花崗岩の塊を主に、赤褐色粘質シルト・黄褐色砂質土のブロックが混じる。平面形は円みの強い隅丸方形である。検出面で長軸長1.65m、推定短軸長1.3mほどである。遺物は出土していない。

SK-34 (図、99)

調査区の中央部の東側斜面に位置している。SU-31と切り合っており、先後関係は不明である。遺構検出面での平面形は隅丸方形で1辺1.4～1.5m、深さ30cmほどである。床面は舟底状となっている。出土遺物はない。

SK-37 (図、128)

調査区の北半部、2号墳の営まれた丘陵鞍部へ移り変わる斜面上に営まれている。西側にはSU-20・38がある。不整形の平面形をもつ土壙で、検出面で長さ2.6m、幅1.5mを測る。床面は北側に向かい階段状に低くなる。埋土は、赤褐色粘質シルトや、黄褐色・黄灰色の砂質土が混じる。遺物は出土していない。

SK-39 (図、128)

SK-21の南西側にあり、互いに切り合っているが、先後関係は不明。隅丸方形の平面形をもつ浅い土壙である。長軸長1.3m以上、短軸長0.85mを測る。遺物は出土していない。

SK-61 (図、128)

調査区の中央の東寄りに位置し、SU-39と切り合っている。当初、SU-39に伴う何らかの施

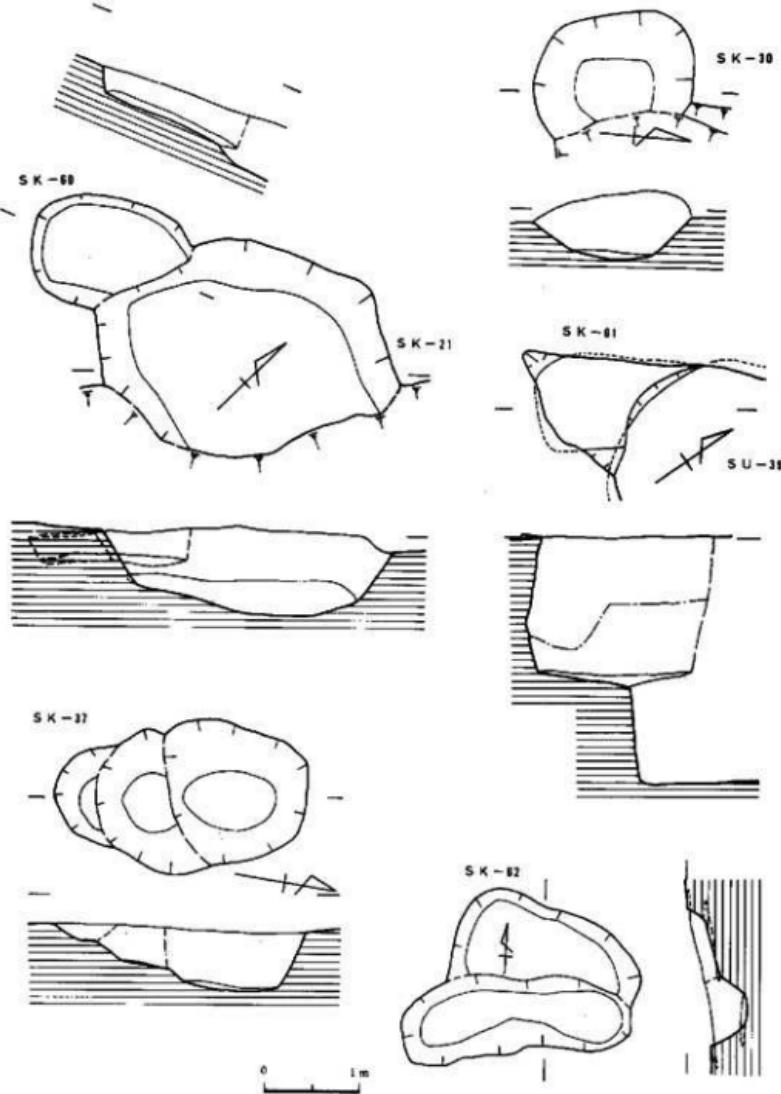


図.128 SK-21・30・37・60～62実測図（縮尺1/60）

設の可能性も考えたが、位置関係から別個の土壙と考えた。北側を欠くが、長さは1.7mほどと推定され、幅は0.95mを測る。平面形は隅丸長方形である。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はない。

S K-62 (図、128)

調査区の南半部に位置する。SU-50の上面で検出した。2段に掘り込まれた土壙である。長軸長2.35mを測る。出土遺物はない。

(3)小穴 (図、29)

調査区の南半部で6個の小穴を検出した。いずれも埋土は、黒色の有機質土である。遺構としてのまとまりもない。また、木の根の痕かと考えられるものも含まれる。小穴からの出土遺物は皆無である。ここでは個々の報告を省略する。

IV まとめ

前述になるが、当調査範囲は独立丘陵上に位置し、周囲の遺跡、遺構から孤立した景観を呈す。この地形的条件を活かした土地利用が弥生時代、古墳時代に考えられた事は言うまでもない。

〈古墳時代〉 調査した2基の古墳は削平を受け、不明な点が多い。かろうじて残された遺構、遺物から若干、まとめておく。まず、築造時期は第2号墳を6世紀前葉に位置づけておきたい。第1号墳は立地から見て第2号墳を遡る時期と思われる。しかし、散在した遺物中には古い形式のものが無く、時期差が短かいのであろうか。以後、この尾根筋には新たな古墳の築造をみず、谷を隔てた東側の尾根筋に3基の古墳が確認されている。

近接する影ヶ浦古墳群も6世紀初頭ないし前葉から築造が開始され、当古墳群と時期を同じくする。尚、最大規模の持田ヶ浦古墳群は5世紀前半代の土壙墓(?)、後半代の竪穴式石室が確認され、影ヶ浦、堤ヶ浦古墳群に先行し、後期の群集墳の実態は、今後期待される。

内部主体は竪穴系横口式石室の形態を呈す。堤ヶ浦古墳群第2号墳に比べ、石室プランの主軸長比率が小さく、やや新しい様相を呈す。

今回調査の第2号墳に伴う祭祠形態に、石室外の集石、土師器の埋置が検出された。堤ヶ浦古墳群においても多様な祭祠形態が検討されているが、今後、留意する必要があろう。

〈弥生時代〉 弥生時代の遺構は、1号墳墳丘から西側、丘陵の先端に集中して営まれている。遺構はほとんどが貯蔵穴で、56基を検出した。遺跡が立地する丘陵の周縁は急斜面をなす。そのため、調査区外には貯蔵穴の分布はひろがらないと考えられる。丘陵上に営まれた貯蔵穴群の1まとまりを、ほぼ完掘したことになる。

貯蔵穴の中には、2段掘りのもの、床面に小穴をもつものなどがあり、それぞれ個性をもつている。しかし、想定される出入口部分の設け方を含み、構造的には4者に大別できる。

A；いわゆるフラスコ状の袋状竪穴の構造をもつもの。56基の中のほとんどがこれに属する。

B；床面に対して出入口部を片側に寄せたもの。床面に梯子を固定させる小穴を掘ったものがある。SU-06・07・16など。

C；床面の四隅、床面の長軸方向に沿って小穴を掘ったもの。柱をたて上屋をつくったものと考えられる。SU-15・33。最近、太宰府市前田遺跡でも、前期前葉の類例が調査されている。

D；竪穴を掘り、さらに横穴を穿ち、風化があまり進んでいない岩層に当たった所で、ドーム状の本体部を造る。古墳時代後期の宮崎県や、中世の福岡市周辺にみられる地下式横穴に類似する。SU-02・17・47。下月隈天神森遺跡でも調査例がある。

今回の調査で、出土土器から時期比定ができる貯蔵穴はきわめて少ないが、前期にはA～D類のすべてが、中期末～後期初にはB・D類が営まれている。これまで袋状竪穴に代表される半地下式の貯蔵穴は、中期前半で姿を消し、高床倉庫へと貯蔵形態が転換されたといわれてきた。しかし、影ヶ浦遺跡では、前述したように中期末～後期初の例がある。最近、比恵遺跡でも中期後半のA類の貯蔵穴が調査されている。従来の考え方には修正の必要があろう。

影ヶ浦古墳群1

—影ヶ浦古墳群第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第241集

平成3年3月15日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目7-23

印刷 (株)ミドリ印刷

福岡市博多区西月隈1丁目122-4
